

ほ、るむへん先

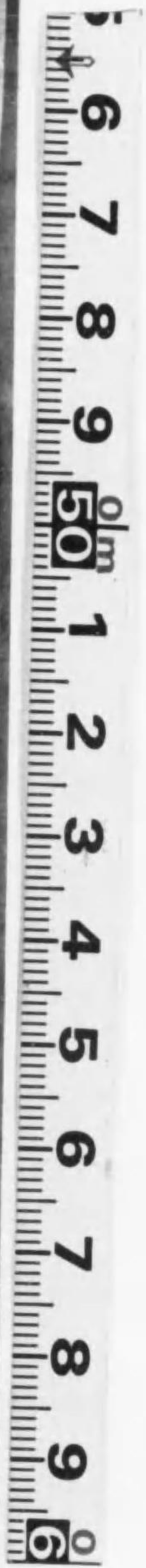
1520

蝸牛園主人著



特234

542



始



特234
542



蝸牛園主人著

ほくむせん先



東京
精華堂出版

少女の明るい乙女心は、いつも快いリズムをなして動いて居ます。手も、足も、胸も、瞳も、スカートも絶えず爽かな気分につけて躍つて居ます。その躍るすべてのものを永久の若さ、明るさにしたいとの念願から呈したのです。

序

百合子さん！

『ほゝゑむペン先』一部を貴女のお手許に贈ります。

貴女の明るい乙女心は、いつも快いリズムをなして動いて居ます。手も、足も、胸も、瞳も、スカートも絶えず爽かな気分につけて躍つて居ます。その躍るすべてのものを永久の若さ、明るさにしたいとの念願から呈したのです。

もう十三年も前のことです。東京の一二の少女雑誌に鈴子といふ、ペンネームで滑稽の筆を執つたのを、今度精華堂の橋川さんには是非にと勧められて、まとめたのです。書中『私』といふは少女鈴子のことです。

序

百合子さん！

私のペン先が貴女にホ、笑みかけて居ます。

貴女が勉強に飽いて、頭が石のやうになつた時、胸がクシヤ／＼して、かんしやく玉がふくれた時、何となく気が沈んで、部屋の隅つこへ行つて、ひとりで泣きたくなつた時、読んで笑つて下されば、私はそれで満足です。

昭和三年八月秋立つ日

蝸牛園茅屋にて

著者

目次

一、海中ダンス.....	一
二、B子さんの勉強振.....	八
三、内の喜劇役者.....	一六
四、なくて七癖.....	三三
五、病床だより.....	三九
六、薬の香をかぎつゝ.....	四二
七、西の濱から.....	四四
八、チヨコレート色人種.....	四七
九、電気小僧.....	五一
一〇、庭のワツシヨイ.....	五七
一一、飛んだ信神.....	六四
一二、あわて者.....	七一

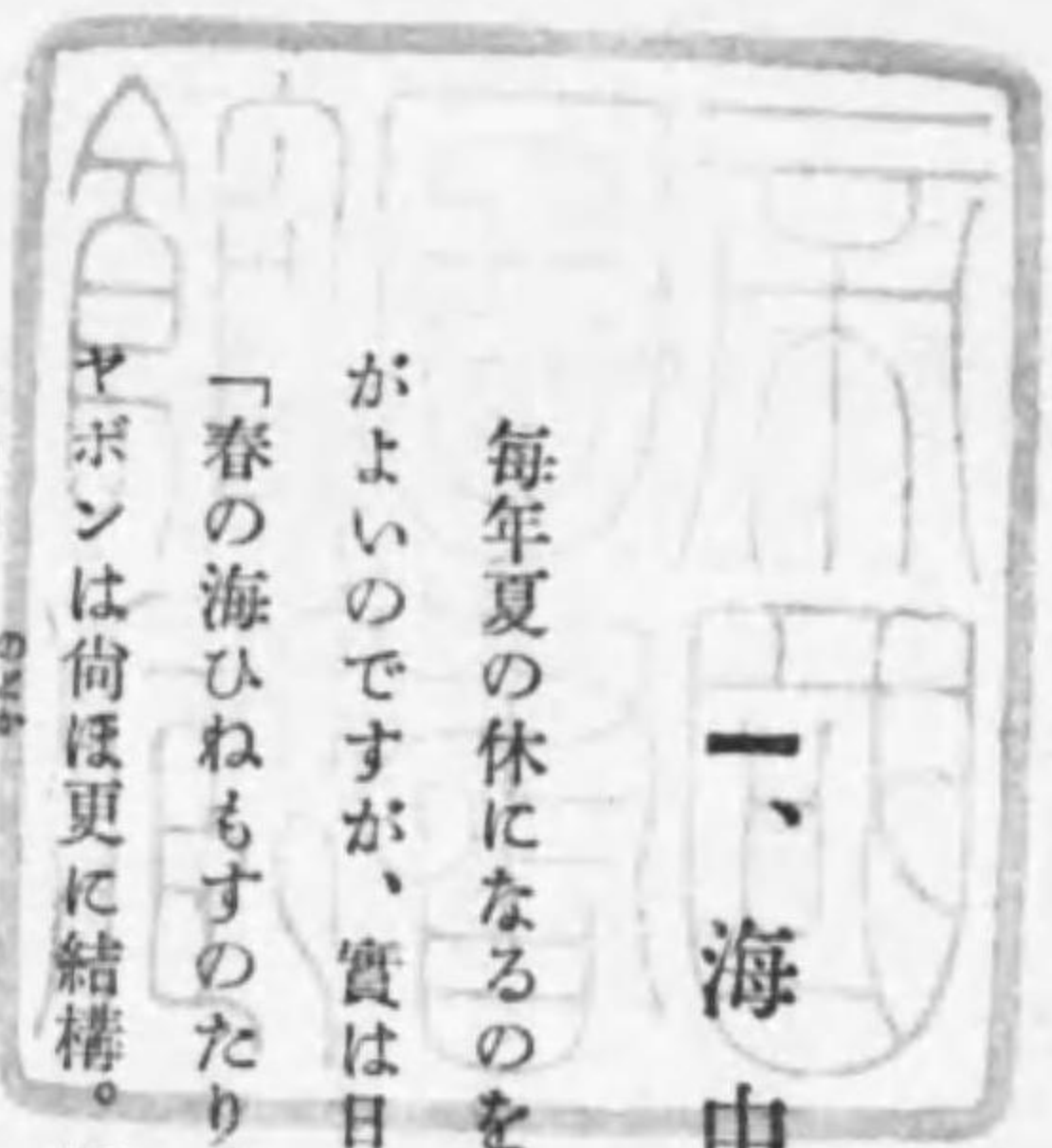
目次

一三、	明るい心の持主	九
一四、	雨中奮闘録	八五
一五、	お芋ほり	九
一六、	兄さんの百面相	一〇〇
一七、	いたづらミイ子	一〇七
一八、	おしつこの水道	二四
一九、	蠅のゆくへ	三三
二〇、	アッコロ大將	三六
二一、	熊蜂退治	三三
二二、	日覆の下	三六
二三、	初めて御飯を焚く	一四
二四、	支那のお芝居	一五
二五、	生れ故郷	一六
二六、	脳味噌脱線	一七
二七、	そよつかし屋	一五

ほゝるむペン先

蝸牛園主人著

一、海中ダンス



毎年夏の休になるのを待ちかねたやうにして、私は海岸へまゐります。避暑と云ふと大變外聞がよいのですが、實は日やけに行くのです。

「春の海ひねもすのたり／＼かな」と春の海岸もよいのですが、夏の海のひねもすチヤボンチヤポンは尙ほ更に結構。御覽なさい、藍を流したあの清らかな水、青々と松が並んだ長い濱、美しい砂、長閑に浪を渡つて来る漁師の船歌、水天髣髴の間に風を孕んだ白帆の影、繪の様な麗し

い自然美の展開に我を忘れて佇たつずんだ時、我が眼に映するものは浄土の姿です。我が耳に響くものはバラダイスの樂の音です。年から年中、都の濁つた空氣の中の生活に倦怠うんげんし切つた體からだに力ある活々した新しい血の流が波打つて天女のやうな歡喜が爪の先にまで満ち溢あふれます。

嘗かつて私が「清らかな海岸に立つと、天女の氣持が味はれる」と申しましたら、姉さんが「そんな眞黒い天女が何處の世界に居らう」と理解のないことを云つて人を馬鹿にされましたけれども、眞黒い天女でも構かまひません、海は全くいゝ氣持です。

私が游泳うゑいの稽古けいこを初めたのは三年前、時に年十三、處は房州北條の海岸です。夏休になるや、否や、兄さん夫婦の引卒で、美喜子さん、清子さん、小枝子さん、玉代さんに私の七人連で出かけることになりました。三日前の晩から、とても嬉しくて寝られたものではありません。忘れてはならぬと云ふので、毎晩寝る時には海水浴への持参品を枕元に並べます。海水着、腹巻、タオルは勿論、齒磨、バラソールに下駄から靴までお行儀よく丁寧に並べ立てると、枕頭まくらながら城壁を築いたやう、濟南事變に我が軍が土囊どふく疊たか々、市街に防禦線を張つた形で、寝るには安全第一

ですが、風通しが悪くて暑いこと妙、それに毎朝敷を當つて見ては片附ける、晩になると縁日の夜店のやうに出し並べる。海水浴も手数のかゝること夥しい。

さあ、いよ／＼當日になりますと、ハンケチは帽子は、下駄は穿いたか金入は何處かと、簞笥長持を持ち出さんばかりの騒さわぎぎして出かけました。

北條へ着いて見ますと、さすがは避暑地で名を得た所、先客萬來で、海中大繁昌。天下の靈峰富士の高根の白雪と相對して、ドス黒い河童連かまいたちが、ドブ／＼、ポチャ／＼、まるで赤芋を洗ふやうな混亂です。水上に上半身を現はしながら抜き手を切つて鮮やかな型を示しつゝ多くの小河童こがわごを指導して居られるのは某學校の水泳の先生です。大人の辯に大きな浮袋を横つ腹はらへ躍はらせながらそれでも身投の状態で首半分の始末に困つて居る人は一名ソマドレーゼの看板、某會社の重役様ださうです。其他雀の行水やしろみづ、石龜いしがめの甲羅かろぼし各自個性を發揮した海濱の情景は、ソツとカメラに收めてお土産にしたいのですが、それは後廻し、早速服を改めて海中の人となります。

兄さんは高等學校時代からの水泳の達人ですから、私共の水泳指導者として最適任です。最初

は顔を水の中につけて體を浮かし、手足を動かす練習から始めます。ですが水に馴れない者に顔を水中につけることは容易ではありません。鼻や耳に水がはいります。若し一度息でもしようものなら大變、海水一時に浸入して鼻の奥がツーンとしたかと思ふと、喉が焼き付いたやうに苦しくて續け様に咳が出ます。

これが一通り終ると、今度は顔を上げて練習です。

「もつと落ち着いて、頭を下げ、手をゆつくり掻いて……、それぢや駄目、もつと頭を下げなきや。」と口で差圖はどうでも出来きすが、水の中の仕事ですから、さう意の如くなるものぢやありません。第一頭を下げると鼻と口から水です。手を前へゆつくり伸ばせば掻かないうちに體がお先に失敬して沈みます。ですから、手が急速度でパチャ／＼、足があはて／＼ドブ／＼、その瞬間に體がグラ／＼のたくつたかと思ふと、身體の總ての部分が水面から消えてしまひます。

かうなると、兄さんがいくから銅羅聲を張り上げて、「もつと首を下げい、手はゆつくり動かせ、」などゝ運動場で魂態先生が體操の號令をおかけになるやうには、命令が正確に行はるゝものでは

ありません。こちらはいくら眞面目にやる氣でも體と水とが云ふことをきゝません。こゝに於てか、兄さんは持て餘し私共は悲觀します。

「お前達のは泳ぎぢやなくつて、水中で夢遊病者が躍つて居るやうなもの、之を稱して海中ダントといふ、アツハツハ」と邊構はず無遠慮に大聲を張上げるので、附近の連中が腹を抱へて笑ひます。私達はきまりが悪くて眞赤になつてしまひます。すると翌日から私共が海岸に行きますと皆の者が

「海中ダンスが来た」と笑ひます。兄さんのお蔭で私達はどう／＼「海中ダンス」になつてしまひました。併し、一週間たちますと、海中ダンスも馬鹿になりません。次第に體の調子がよくなつて来る。一生懸命は恐しいものです。この位緊張努力の生活を學業へ向ければ優等生疑ひなしだが、思ふまゝには奈良の大佛、月見堂、どうともされぬ世の中です。

何事にも熱心で器用な性の清子さんは、水泳にかけても一行中の花形です。練習十日を出でずして四五間は泳げるやうになりました。

「まあ、お上手ねえ。」と私共は羨しがりながら、その游泳振を拜見せずには居られません。眉を額のでつべんに吊上げて小さくもない目玉をまんまるにして、口先を尖らしながら懸命な奮闘振は奇観と云へば奇観ですが、全く以てえらいものです。かうなると、兄さんも景氣づいて、

「それだ、それだ。その調子だ」と自然に御指南役に力瘤がはいります。その時です、沖を通つたモーターボートの横波が、今や小鮪が水に酔つて水面にアブクを立てるやうな格好で泳いで居た清子さんの顔にガブリと無遠慮に打ちかゝると、何かは以てたまるべきブク／＼と音を立て、無雑作に清子さんは見えなくなつてしまいました。あわてたのは兄さんです早速飛び込んで清子さんを引き上げる。私共は青くなつて取り巻いた。清子さんは苦しうにゲツ／＼とやつて居られます。

「まあ、どうなすつて」

「水を呑んだわ。」と息がとぎれ／＼。

「氣持が悪いでせう。」と皆が眉をひそめる。

「何に大丈夫よ。水はからいのね。」

「そりやさうですとも、海だもの」

「お肴はよくこんなものを飲んで生きてるのねえ。」と目玉を白黒。成程も少し呑めば海中の中で葬式を出すところです。

「それでもよかつたのね、澤山吞ますに。」一同安堵の胸を撫でると、兄さんが

「ありやあ潜航艇のまねさ。そんな事が度々なければ上手にはなれない。」と例の皮肉に皆が吹出しました。これから清子さんは潜航艇と云ふニツクネームを奉られてしまひました。

海中ダンス、潜航艇、云ひたいものは何とでも云ふがよい。そんなことに僻易して居ては折角房州くんだり黒くなりに来た意義がありません。私共は顔の皮を十枚張にして海坊主共の悪口を馬の耳に念佛と聞き流しながら毎日練磨の効あつて一ヶ月の休みに最も下手糞の私さへ十二間半のレコードを作つて凱歌を奏して、北條を引き上げたのは、新學期が始まる三日前、白い所は目玉と齒ばかりの海中ダンス一行が東京に着いた時には都大路には早秋風が訪づれて居りまし

た。

八

二、B子さんの勉強振

どうした風の吹き廻しか、虫の居處がどう變つたか、B子さんは、日曜にも拘らず、平素の不勉強家にも似ず、今日は珍しくも朝から机に向つて本を取り出しました。

「オヤツ、勉強かい、珍しいねえ。」と先づ目を丸くした兄さん、

「今日はお天氣がよいと思つたら、又雨かね、困つたものだ。」誰かそちらでテル／＼坊主を拵へて呉れないか、と大聲で怒鳴られると、事情を知らない姉さんは、

「日がカン／＼照つて居るに寝惚けちやいけませんよ」と次の間から、

「何に今に降り出すよ、茲で雨乞が始まつたんだから。」と笑はれますので、姉さんも襖を開けて

「オヤ／＼珍らしいこともあるものですね、そんな降る／＼坊主が出来ちや、私の照る／＼坊主

位ぢや追つ着きませんよ。」と冷かされて、

「ひどいわ、姉さんまで……随分ですわ、」とB子さんはブリ／＼怒ります。

「オヤ、フル／＼坊主かと思つたらブリ／＼坊主だ。」と兄さんが又憎まれ口、

「どうせフル／＼のブリ／＼ですよ。脊高ノツポの唐變木とは違ひますよ。」

「オー、恐い／＼、硯石でも打つ着けられると大變だ。」と兄さんは退却。

併し、實際こんなことは珍らしかつたのです。B子さんの机が今日のやうに朝から勉強臺に使はるゝことはハレー彗星が表はれた位の程度に於て珍しいのであります。何故かと申しますと、その机は、學校から歸つて來た時、本包をポーンと投げ出す處、編物をする時の腰掛け、書物を前にふらりふらりお辭儀をやる所、お父さんに叱られたり、兄さんと喧嘩したりした時、其上に打働して泣く臺などに使用される外勉強に利用されることは三百六十五日絶えてないと云つてもよいのであります。

さて、机の前に据つたフル／＼のブリ／＼のB子さんは先づ最初に歴史の本を取り出しました

そしてなか／＼景氣のよい調子で音讀を初めました。併し、一頁をはぐつて二頁の中程に行くと餘程勢が抜けて、三頁にかゝつた頃は聲がぼん／＼くぼへ漏電したやうで頗る不景氣となりました。すると、間もなく聲が止んで、

「此の邊は讀まないでも分つて居るわ。」と獨語を云ひつゝ六七頁バラ／＼とはぐつて、四五行讀んで見ましたが、急に思ひ付いたやうに、

「ア、それよりも理科を見なけりやならないわ。」と歴史の本は疊んで脇へ置いて、理科の本を取り出しました。今度は聲を立てずに四五行讀んで見ました。が如何にもつまらなさうに、

「こんな所は駄目だわ。」と子Bさんは食指を嘗めたかと思ふとバラ／＼と先へ又頁を繰りました。

今度は又少し聲を立て、

「第十四章、アンモニア、アンモニアの成生アンモニアは……」と讀み出したかと思ふと、

「本當にアンモニア、アンモニアつて煩い本ね。アンモニアなんて人聽が悪いから止さう。」

と理科の本は秩序よく歴史の本の上に重ねられました。

次に取り出したのは國語讀本。今度は、「第八課」と音吐朗々、元氣大に回復の體で、頗る調子づく。唯々ちよい／＼「水雷はげに雷か」と讀むのを「水雷、はげに雷か」と讀んだり、「走馬燈の如し」と讀むのを、「走り馬、燈の如し」と念入りに讀んで、傍で聽いて居たんぢや、私の様に悟の悪い人間には想像にも及びかねる讀み方などもありましたが、大體に上出來で、三頁ばかりは走り馬の勢で進みました、此の間約二分十五秘。所が、四頁にかゝつて、

「横雲東にたなびきて、鳥の聲いと勇まし」と云ふ處で、B子さんの口が大きく胃袋の奥まで見えるほどに開いたかと思ふと、

「横雲東にたなびきてエ、アア」と力が急に抜けて、「鳥」は全く「ムニア／＼」と欠伸と共に嘔み潰されてしまいました。これで、國語讀本は目茶々々になりました。

次にB子さんは何をしようかと、聊か迷つたやうに小首を傾けました。

「オー、さう／＼數學の宿題があつたつけ」と急に狼狽したやうな態度で數學を始めました。元

來、B子さんは何の學科も箇コロほどには好きではありませんが、就中數學は思召しに叶はぬものであります。B子さんに云はせますと、數學の先生なる者の顔からして氣に喰はないんださうです。即ちプラスとマイナスとを應用して作つたやうな角面に、○を意味する圓い大きい眼が冷かに光つて、イクオール式の唇が固く愛嬌に結んだ所など實に癢ださうです。けれども、宿題をして行かなければ、閻魔帳に赤い印がつけられますから、學年末に浮ばれないこととなりますのでB子さんは閻魔帳に恐れて宿題に取りかゝりました。

「一斤の價五拾五錢の茶八斤と、七拾五錢の茶六斤とを混ぜて一斤六拾五錢にて賣れり。此の損益幾何なるか。」B子さんは首を傾けて幾度か讀み直しました。

「五拾五錢が八斤、七拾五錢が六斤、六斤の方が七拾五錢で、八斤の方が五拾五錢」と同じことを繰り返して、

「妙な問題ね、算術の問題は皆な意地の悪いのばかりだから嫌ひだわ。お茶屋さんになるんぢやあるまいし」と云ひながら、B子さんはいま／＼しさうに目をそらすと鉛筆の先が少々潰れて居

るのに氣がつかしました。そこで、ナイフを取り出して念入りに削り始めました。五六分もかゝつて削り上つたのを見ますと、鉛筆の先が一寸餘も長く針の様に尖つて居ました。B子さんはその鉛筆で此度は七拾五錢」と「五拾五錢」とを加へて、二で割つた式を書きました。我し、「八斤」と「六斤」のやり場に窮しました。彼女は大きく一つ歎息をついて立ち上りました。どうするかと思ひましたら、立つて便所へ這入りました。昔から「考へ事は便所に限る」と申しますから、B子さんも問題を便所で解決するんだなど、私は便所に多大なる望を囑して出て來るのを持つて居ますと、出て來たB子さんは、全く豫期と反して、唯々茫然と机の前に坐つてしまひました。失望して居ますと、筆記帳の端を裂いて紙燃を作り初めました。何をするのだらうと、少からぬ興味を以て見て居りますと、造り上げる紙燃を遠慮なく鼻の中へ突き込みました。之は何かのお呪ひかと思ひの外、ハクシヨン、ハクシヨンと吃驚する様な大噓が續けざまに二つ出たつきりでありました。所が、B子さんは此の噓で急に復活した様に、

「オヤ／＼忘れて居るわ。」と立ち上つて庭に下りました。何事が起つたかを見て居ると、如露に

水を汲んで来て朝顔に水をかけ始めました。それが終ると一しきり傍に咲いて居るダリアに見惚れました。其序に紅白絞咲きの鮮やかな一輪を取つて来て、一輪挿にさして暫し眺め入つて首をかしげました。けれども、まだ數學の問題が氣にかゝつたと見えて第二の問題にかゝりました。第一題は未解決のまゝお預りとなつたのです。だが、第二の結果も左程上等でなかつた様子でしたが、數學は三題にして見捨てられました。

今度は硯を持つて臺所に立つて行きました。お手習が始まるのであります。B子さんは可なり長い間墨を磨りました。そして白紙を伸べ、手本をひろげて書き出しましたが、一字書くのに五六度手本を見ました。けれども、天と云ふ字のはねがヘナ／＼と鯨の尻尾のやうに泳いでうま／＼出来なかつたので一字書いたきりで反古にしました、二度目のは生憎二字目の字の横棒がなめくじのやうに太り、堅棒が蚯蚓のやうに伸びたのでお氣に召さずして、可愛さうに頭から墨を塗くられてしまひました。三枚目は五六字の處に到つて、一寸手元が狂つてた爲めメソ子の居眠り見たやうに不恰好に型が崩れてしまひました。ので、癩癩玉が破裂して紙はクシヤ／＼にされてしま

ひした。それからの五六枚も、筆が云ふことをさかなかつたり、墨が散つたり、紙が辻つたりして、思ふにまかせず引き裂いたり、圓めたり、紙屑籠が大繁昌して居る所へ、お隣のA子さんが垣根越しに

「B子さん、いらつしつて、御勉強？」と聲をかけました。

「エー、マアいらつしやいよ。」B子さんは大に景氣づきました。

「お邪魔でなくつて？」と裏木戸から這入つて来たA子さんは、B子さんの勉強に少からず度膽を抜かれました。

「大變御勉強ね?!」

「何に、思つたほど出来ないのよ。」

「でも感心ね、何の御勉強?」

「朝御飯濟ましてから歴史と理科と國語と數學と習字をしたのよ」

「えらい勢ね、美しいわ!」

B子さんの勉強振り

「だつて、タツタ五科よ。それでもウンザリしてよ。」彼の鼻が得意げに動きました。

B子さんは斯くの如く誇るべき勉強をしたのです。今其勉強を數學の式で表しますと次の様な答が出ました。

(B子十勉強)ーウんキリニヤロ

三、内の喜劇役者

私の家に今年十五になるお辰と云ふ女中が居ます。十五と云つても體も仕事も十三位しかありません。それで一日の仕事の大部分は子守で、その餘暇に火起し、鍋洗ひ、便所のお掃除位の端役を仰せ付かるに過ぎませんが、その癖、子守と云はるゝのが大嫌ひで、酒屋の小僧からお守さんと云はれるのを此の上もない侮辱と心得、女中さんと呼はるゝのを鬼の首でも引き抜いたやうに無上の光榮として居ります。

一體、女中と申しますと昔から頓馬をやりつけております。滑稽を演ずるものと相場がきまつて居て、芝居などに出るおさん殿は、どれもく申合せた様に頓珍漢を演じてお客さんを喜ばせますが、内の此のおさん殿もお多分に漏れず、其方の千兩役者で、時折願の掛金が脱れるやうな滑稽をいたします。

尤もおさん殿と申しましても、ダンペー國から直輸入のおさん殿と違ひまして、江戸ツ子のホヤ／＼で御座いますから、お晝御飯をおしる御飯と云つたり、おしやもじをおひやもじと云ふ位の缺點は免れませんが、通譯が入るやうなダンペー語を平氣で連發するやうな舊式のおさん殿とは品變り、尋常科も一番、但しピリからの勘定で卒業した都育ちだけに、新聞や雑誌も讀めば正々堂々ハイドウ／＼と云ふ様な漢語を使つて人を驚かしたり、ブラットホーム、やトラホーム位の英語も知つて居ります、所謂新しいおさん殿の末席を汚して居る方で御座います。

此の頃、私が或雑誌を見て居りますと、お辰も傍に來て覗き込みながら、其中に在るおさん殿のポンチ繪に目をつけて、

内の喜劇役者

「お嬢様、總理大臣とお女中位割の悪い役は世の中に御座いませんねえ、」と歎息しますから、「なせ」と云ひますと、

「だつて總理大臣と女中の悪口を書いてない本はございませんもの。」私が思はず吹き出しますとお辰は尙ほ眞面目に、

「一體、あの繪は誰が書くので御座いませう。随分で御座いますね。」と憤慨して居ますから、

「其社に書く人が居るのよ」と申しますと、

「へーい、そんな事を書く人はどんな顔をして居ります?。」

「どんな顔つて當り前の人間さ」

「へーい、矢張り當り前の人間で御座いますか。」と感心して居りますから、いよ／＼吹き出さずには居られません。

それはさて置き、此のお辰の十八番をあげますと、居眠りすること、寢惚けること、粗忽なこと、などは其最も主なるものでありますが、併し正直なことは此上なしで、破した茶椀を御飯粒

でつけて見たり、頭痛がする時はお芋の皮に限ると云はれて、焼芋の皮を額に貼り着けたりします。尾籠な話ですが、先日猫が庭の隅に糞をして居るのを見さんが見て、

「お辰、お前かい、茲に猫の糞をしたのは、」と揶揄ひますと、

「イ、エ、私は致しません。」

「でもお前より外にこんことをする者はないよ」

「だつて私は生れてからまだ猫の糞は一度も致しましたことは御座いませんもの。」とベソをかいて、苦虫かみつぶしのお父さんまでが吹出さしてしまひます。

居眠りしない女中は恐らく世界に居りませんまい。お辰も自ら女中を以て任じて居るだけに朝でも晝でも、坐りさへすれば居眠を初めます、時には夕御飯を喰べながら漕いで居る時すらあります。前後左右に首を振り落しさうに熱心に居眠して居る時、念に聲をかけますと、大概は頓珍漢なことをするか、云ふかいたします。御参考までに一つ二つ例を擧げて見ませうか。

先達の夜、火鉢の前で頻りにコクリ／＼やつて居りますから、

「お辰や、お辰や」と聲をかけましたら、

「ハイ、どうもお御馳走様でございます。」と云ひながらキョロ／＼いたします。居眠りながら、おやつのお夢でも見て居たのでせう。私は吹き出しさうな可笑しさを喉で殺して、

「何が御馳走様だえ？」と申しますと、

「おや、これはタドンでございますか。」と炭取の炭團を見て失望した顔付が十錢や十五錢の木戸賃では見られぬ面相でありました。

又昨晚の如きは、兄さんが、

「お辰、火事だよ。」と大聲でおどしましたら、「ハイ」と答へて目をこすり、パチクリしながら、

「何方の見當でございます？」

「何方の見當もあるものか、お前の隣ぢやないか。」

「エツ、私の隣、消防はもう参りましたか。」

「消防の代りに寢坊が来て居るよ。」

皆がドツと笑ひますと、頻に顔を撫で廻しながら、

「もう消えましたか。」は奇抜を通り越して形容の言葉がありません。併し、かうは申しますものゝ晩は遅く寝、朝は一番早く起されるのですから無理もないことゝ同情に堪へない點もあります。

お辰は大變辛抱者で、お金を大事にいたします。毎月の給金は十錢か十五錢を小供に取つて、残りは皆郵便貯金にいたします。今三十圓ばかりありますが、虎の子の様にして時々出して見るとはニヤリ／＼して居ります。あまり大事にするものを兄さんが可笑しがつて、

「實に美しいね、僕に少し貸して呉れないか。貸せないなら、お前の留守におれが引き出して使つて仕舞ふぞ」と申しましたら、それつきり朝から晩まで、寝るも起きるを貯金帳を懐ろにして、五錢入の蝦蟆口まで肌身離さず持つて居ります。

すると或夕方焚きかけの御飯をそちのけで、長い棒を持つて便所を出たり遣入つたりして居りますから、

「何をして居るの」と尋ねますと、

「何に一寸……」と平氣を装うて居りますけれども、臭氣紛々として居るのを見ても唯事ではありません。然しお辰はそれ以上を語らず、流の外で水道の水をチア／＼出して小さな物を洗つて居りますから、行つて見ますと、驚くではありませんか、黄金色になつた臭い蝦蟆口を鼻をつまみながら棒の先であしらつて居ります。其自白する所によりますと、便所に行つて立つた拍子に、懐から抜けて、スポンと壺の中に落つこちたのださうです。それを今やつと引き上げたところだつたのです。さて、其金高はと尋ねますと、大枚五錢五厘。

序に申しますが、或時私はお辰に

「お前は金を溜めてどうするの。」と尋ねて見ました。すると、

「お嫁入の持参金にいたします。」と答へました。すると、例によつて傍から兄さんが

「お前も良妻賢母主義かね。」と聞きますと、

「良妻賢母の祝儀とはどんなにするのでございますか、矢張大神宮様でいたしますので御座い

ますか。」

「マアそんなものだね」

「でもお金が澤山入りませう。」

「何に十圓ありや出来るよ。」

「へーい、良妻賢母の祝儀は、そんなに安直に出来るので御座いますか。それぢ只今でも出来ません。」

「出来るとも、誰とお祝儀をするんだ。」

「さあ誰といたしませう。あなたとでも構ひません。」と眞面目な顔。流石の兄さもこれにはギヤフン。

四、なくて七癖

俗になくて七癖、あつて四十七癖とか申します。寝坊する癖、寝言を云ふ癖、いびき、齒ぎし

なくて七癖

り寝小便、寝て居る間の癖でも數へ立てれば十人十色の特色があります。

アメリカの子供に日本人と云ふ題で文を作らせましたら、「日本人は指で鼻をほじり、鉛筆を嘗めて字を書く紳士なり。」と發表したものがあつたさうですが、先生が百點つけたか、どうかは聞き洩らしましたが日本人の特色を遺憾なく發揮した點に於ては蓋し傑作たるを失はない名文でせう。

鼻をほじると云へば必ずしも我が紳士のみの特許特許とも限りません。淑女間にも相當行はれるやうに思はれます。或日上野の圖書館に行つて讀書して居ますと、私と席を並べ居た一人の御婦人がありました。髪を七分三分にして眼鏡を掛けた奥様風の上品な方、その方が本を見ながら頻りに右手を動かしていらつしやるのに氣付きました。何をしてお出でだらうと好奇心に驅られながら本を讀むふりして尙に御動靜を伺つて居ますと讀書の傍ら夢中に鼻掃除をやつて居られます。そして時々掃除用の人差指を親指とひねり合せて小さな丸薬をこしらへては本の上に落しつゝ讀み進んで行く。やがて頁の終が來ると、兩手で本を持ち上げながら、白いうなじを一寸しゃくくて

上にあつ丸薬をフツと吹き飛ばされる。吹き飛ばされた丸薬は前の人の文化帯にぶつつかつてコロ／＼と轉がり腰掛の一角を迂つて床へ落ちました。併し御本人は平氣の平左で掃除用の人差指の頭を一寸嘗めて讀み終つた頁をバツと一ゆくり、其の途端に薬指のダイヤ入指輪がキラツと光つて電のやうに私の目を射返しました。私はハツと思つて眼を脇へそらした時頬がほてつて耳たぶらがムツがゆくなりました。

潔癖は日本人一般の共通な美點と云はれて居ります。毎日風呂に入らねば承知の出來ぬ國民であります。西洋人はあまり風呂に遣入らないと申します、上流社會でも一週間、二週間は愚か。一月二月風呂に入らないでも平氣ださうです此の勘定で行くと下階社會では一年二年も無浴の人があるでせう。

そんなに長く私共がお湯に入らなかつたらどうでせう。首の周圍は垢が三寸、手足は鼠色となつて體臭紛々、恐らく人中には出られないでせう。その割合に西洋人は案外綺麗です。始終風呂に入りながら耳の下には垢の絶えない日本人の多いものとは雲泥の差であります。一體西洋人は

白色人種で垢まで白いのだらうかと聞いて見ますと、洋行歸の伯父さん曰く、

「我が英國人は日本人で「我が英國人」も變ですがこの伯父さんは何かと云ふと「我が英國人」と云ふのが得意の口癖です」我が英國人は我が同胞と異つて肌付のシャツやカラを殆ど毎日の如く取り換へる。それゆゑに皮膚がよれない。然るにぢや、日本人はシャツを一月も二月も洗濯をせず、眞黒くなるまで着て居るから垢がつき易い。垢がつくから風呂に入らざるを得ないのである彼はシャツを洗つて身體を清潔にし、此は身體を洗つて穢を去る所以である」と。

成程一理あるやうです。けれども、いくらシャツを取り換へても二月も風呂入らずではいかゞなものでせう。シャツは少々汚れて居ても、一浴した後の心持は又格別、忘我遊神の感があります。我が錢湯の繁榮茲に在りと誇りたくなります。

さて、その錢湯に行つて驚くことが度々あるのは聊か僻易します。と云ふのは湯舟の外で身體を洗ひもせずに飛び込んで来て、ブル／＼顔を洗ふのはまだよいとして、垢が眞白く浮いて居る湯を口に含んでグツ／＼口をゆすいで、それを又候御丁寧に湯の中に吐き戻しながら、南無阿

彌陀佛、南無阿彌陀佛とお念佛を唱へて居るお婆さんがあります。御本人はこれで成佛が出来るか知りませんが、隣近所はとも浮ばれません。かう云ふ相手に限つて熱湯好きの長つ風呂で眞赤にゆだつてから流場に上ります。上つたら洗ふのかと思ふと洗ふでもなく洗はざるでもなく、手拭を團子丸めにしてもうお仕舞、その代り洗ひさらひお嫁さんの悪口を叩いてから又ドブン。それから湯の中でも腹も背中も手も足も芋を洗ふやうに御丁寧に洗ひこくつて出て行きます。

併し、これは獨女湯ばかりぢやありません。男湯だつて随分です。もう半時間前から湯舟の中で都々逸や浪花節を怒鳴つて居る人があります。人の迷惑などはお構なし、鶯鳥が喉をしめられるやうな奇聲蠻音を張り上げながら調子はづれの丈句をまくし立てるのだからたまりません。女湯などの血氣持は目が廻つてしまひます。御本人は風呂賃五錢を奮發して浪花節を語りに来て悦に入つて居るのでせうが、文字通りの鼻先で之を聞かされる者こそよい面の皮です。

蟹は甲に合せて穴を掘り、カメレオンは場所に應じて色を變へます。人も環境によつて個性が迷ひ、個性によつていろいろの癖があります。チョツキン／＼の床屋さんは次の頭にかゝる前に

立ちながら一寸一服、呉服屋の番頭さんは奥様の前に揉手をしながら米搗つきバツタの最敬礼、オールバツタのモボさんは長い髪毛を撫で上げ撫で上げテニスするにも忙しいこと。お隣の小父さんは大の喫煙家です。寝た時の外は年から年中口から煙草をはなしたことがありません。だから工場の煙突見たやうに鼻から煙が出通しです。尾籠な話ですが、便利の窓から煙が立つて居る時には今小父さんの御用中だと分ります。その煙を八百屋の小僧さんが便所火事だと騒ぎ立てた珍談さへある位です。さて、此の小父さんにも亦面白い癖があります。巻煙草を吹かしながら道を歩く時には必ず電信柱に持つて行つて先に着いて居る灰を落されることです。ですから、いくら灰が出来ても電信柱が来なければ灰を打ち落すことをなされないので。之が何のお呪になるのかは誰も分りませんが、迷惑千萬なのは電信柱です。お役所の行き返り、散歩の序に足下に來ては煙草のお灸を据ゑられるのだからたまつたものではありません。終日終夜同じ所に立ち暮して、雨風に打たれ寒暑にさらされても不平一つ言はぬのをよいことにして、酔ひどれが來ては額を打ちつける。店の小僧が走つて來て自轉車をぶつ着ける。おまけに自動車疾走しながら正面

衝突をやる更に甚しきは犬までが畜生の分際で輕蔑して片足を上げたかと思ふと小便をひっかけて行く心あるものは全く同情に堪へません。

是に於てか、小父さんだけならお灸をよして戴きたいものと祈つてをります。

五、病床だより

胸の痛みと發熱のために、座敷のまん中の寢床のまん中にひっくり返へつてから、もう四週間に成ります。別に號外も出しませんが、皆さんは御存じないでせうが、病名は神經衰弱とか榮養不良とか云ふ様な新式なわけではありませんが、と云つて、金鰐や、大福などにあてられたと云ふ様な舊式の外聞の悪いのでは無論ありません。と云つて餘り名譽の病氣でもなく、肋膜炎とかで肺の外側を包んで居る膜の中に水がたまつたんださうです。水は可なりたまつて居たんださうです。尾籠なお話ですが、下の方にたまつた水とは違つて、熱が出て呼吸が苦しくなつて、病床

に横たはる迄は、左の胸一ぱいたまつて居やうなんて云ふ事は、嘗て夢にも考へなかつた事で、寢耳に水とは全くかう云ふ水を云ふのでありませう。

人間と云ふ者は、病床につくと誠に弱い者で、右も向けなければ左にも動けない床にひつくり返へつたまゝ、僅に足をのばしたり縮めたり、手を出したり、引つ込めたり、首を左右へ動す位な事で、全くひつくり返された龜の子と同じ運命に陥つてしまひました。

最初は、三十九度以上の熱で頭には氷枕氷囊を着けるやら、胸にも前後にも氷囊を負はされるやらで、冷たかつたり、暑つかつたりで、自分の身體はどうなる事かと、心細い感じがしました。

良薬は口に苦しと申しますが、肋膜炎の薬は全く良薬だと見えて、非常に滅法に、頗る甚た、飛び切りに苦いものが這入つて居るので、病氣よりもこの薬を頂戴する方が、命にかゝる様な氣持がいたします。尤も散薬は、オブラートに包んでお湯で流し込みますから、誠に重寶ですが、水薬は、實に病人泣せです。私は或る日お醫者様に

「水薬を包むオブラートはありませんか」と尋ねました。

「そんな都合のいゝものはありませんねえ。」

「ちや先生が發明なさると成功しますよ。」

「私よりも貴女が一つ發明なすつたら如何です。きつと學校のお仲間歓迎されますよ。ハツハツハツ」と幕の内の様な圖體をした先生は、布袋様のやうな腹に波を打たせてお笑ひになりました。だつてそんなものが發明出来る位に精巧だと毎日お辨當提げてわざわざ學校に居眠りしには行きはしません。

先生は、本當に、大兵肥滿の大男であります。頭が尖がつて、頬つべたが下つた様子は最新式のピリケンと云ふ様な格好であります。内のお父さんは、先生の體格を評して、あのお醫者さんは、慈惠院出身ださうだが、回向院出身の間違かも知れぬと云はれた事があります。私には何の意味だか、よく解りませんでした。この頃初めてその疑問が解けました。

或日診察が終つてから、先生に向つて、

病床だとり

「先生は御角力さんの様に肥つて居らつしやいますが、どの位目方がおありになりますか」と尋ねました。

「まあ廿四五貫ですなあ。」

「それではお醫者の横綱でいらつしやいますねえ。」

「ところがさうでないです、醫者仲間の中には三十貫と云ふ横綱があります。これで私は先づ脇位の處です。然し、或る角力取りが私の身體を見て、醫者には惜しかつたなあ回向院に來りやきつと幕の内だが、もう十貫位は殖ゑるんだと申しました。」と笑はれました。その上に十貫も殖ゑたら、ソマトーゼの廣告と、ビールの看板を調合した様な化物になつて仕舞ふでせう。

私の病は毎日常第に快方に向つて居ます、此處に私の家から珍しい新患者を突發しました。それは、姉さんで、最初左の唇に近い頬邊に、粟粒大のお腫物が出來たのが原因で二三日すると熱と、痛みと、腫れとで、頬べたの格好が出來損ひの徳利見た様になつて、よほど御面相に大革命が起りかけました。さあ大變と云ふので、お醫様がお出になつた序に診てもらはれますと、

「随分大くなりましたねえ、どれ〜」と云ひながら、お腫物の周圍を頻りに押しますと姉さんは我慢し切れないで、

「そんなに先生の様子に、敵扱ひになさると、ほつべたが爆發して仕舞ひます。」と涙をポロポロ。けれども先生は、平氣なもので、

「早く爆發すればいゝんですがなあ、然し切らなくつても自然に口が開きませう」と云つて手當の方法を教へて歸られました。

姉さんは、頬邊に黒砂糖の様なお藥を塗つたり、氷嚢を當てたり、あらゆる手段を盡されました。甲斐がなくて、頬邊はいよ〜不格好に、恰も唐茄子を押し潰した様で片方の唇は脣パンを投げつけた様な、珍世界の見せ物に出品しても一等請合と云ふ顔になつて仕舞ひました。私が姉さんに向つて、さう云ふ顔を寫眞に撮つて置くと、後世にきつと何かの参考になるよ。」一寸口をこべらした原因で、

「死そこなつて居て、餘計なお世話だ、ロクでなしだから、肋膜炎などがくつついたのよ。」とお

腫物の顔が一層ふくれた。

「ロクでなしだから、肋膜炎にかゝるんなら出来そこない人間だから、お腫物が出来たのよ。」と肋膜もまけずに、口を尖らしました。

「何ですそんなに大きい聲をして」と、奥からお母さまの聲がします。

私は頭から蒲團を被つてしまひました。

六、薬の香をかぎつゝ

私の病氣は未だ癒りません。もう五十日餘りになります。五十日と申しますと、百日の半分一年のざつと七分の一です。七分の一と云ふ數量はなか／＼太したものです。茲に一反の反物があるとします。其七分の一を切り取れば着物でない、半バ物になつてしまひます。

茲に私が持参金七萬圓を持つて居るとします。其七分の一即ち一萬圓を泥棒に逢つたとします

とそれこそ大變。迎てもかうして安閑と床に横はつて居る譯にはまゐりません、然しその一萬圓を皆さんに差上げるとしましたら、中には夢ではないかと身をつねつて見る方がありませう。七福神も一人抜けると六福神、それではちつとも話になりません。辨慶の七ツ道具も一ツ取つたら荷が軽くなるかも知れませんが、「辨慶の六ツ道具でござい。」と往來を叫んで歩いたところで、狂人扱ひにして誰も相手にいたしません。

して見ますと、私の五十日の就床は大變な事になつてしまひました。然し時を俟つより外に何とも方法がありませんから、毎日かうして天井と睨めつくらをして明し暮して居ります。其の間にちよいと考へ浮んだ事を内證でY子さんに速記して戴くのであります。未だ筆を取る事を禁じられて居ますから。

五十日の間には人生と自然とを問はず、非常に變化するものであると云ふ事を病氣の徒然なるまゝに發見したのであります。例へば膝行つて歩いて居た二つの謙坊が立つてあつちへよろり、こつちへひよろりと歩く様になり、私が臥つく少し前に生れた猫の子が飛び廻つて、お父さんの

大事な植木鉢などヒツクリ返すやうになり、庭の青い枇杷の實が黄く色付いて來たり、それと同時に親類のT子さんがお嫁さん話が持ち上つたとかで急に肩を下して白粉廢止論を撤回してホーカー液などの提灯持ちを初めたり、お巡査さんの黒い服装が白くなつて、烏が一足飛びに驚に化けたやうで黒い顔丈けが目立つたり、其間に兄さんが、西南學派とか云ふ西洋哲學者に感服が出來なくなつたとかで、印度哲學にかぶれかけたり、土溝のボーフラが蚊となり、疊の間の小さな卵が蚤に化け便所の蛹が蠅と化したり種々様々の發展變化で目が廻りさうです。

尤も其の中の大部分は直接私に關係ないものが多いのです。例へばお巡査さんの黒服が白くなつたとて、私が買つてやる譯ではありませんからどちでもよし、T子さんがお嫁さんになられても私がお婿さんになるのでありませんから、そんなに悲觀するにも當りませんし、又西南學派でも印度哲學でもソンの事は直接私の損にも得にもなりませんから暇なお方にお任せして置きますが茲に私に直接大關係あるものが三ツあります。蚤と、蚊と、蠅と。

私はこの三ツは心底から嫌ひです、嫌ひでも彼等は私に付き纏ひます。一體日本の家は彼等の

ために開放的に出來て居て疊などは殊に蚤の生活に多大の便宜を與へて居りますですから。晝は隠れて居て夜はコソ／＼出かけます。そして人の寢床へ忍び込んで來て、ムヅ／＼始めます。このムヅ／＼は神經過敏になつた病人を一入過敏にします。やがてチクリと來る。いま／＼しいからムヅ／＼、チクリのあたりを急に手で抑へて見る。何の手答もない。もう逃げて居るのです。まるで巾着切りの様な機敏さ、手を引くと又ムヅムヅが始まります。向ふが機敏でこちらが過敏だから、いよ／＼癢に障つて居ると傍に寢て居る姉さんがムク／＼と起き上つた。今寢たばかりだから目が覺める筈がないと見て居ると、姉さんは寢床の上に寢卷の裾をひつくり反し始めました。「ハハアお隣さんも御同様だ」と、そつと狸寢をして見て居ると、縫込のあたりから黒い影がひらめいて、白い敷布の上に飛び下りた小さな魔の如き奴が狼狽した様子でゴソ／＼そこらを這ひずり廻つて居る「あらツ」と云ひながら、姉さんはそれを指先で抑へ付けました。すると、もうびんと脇へ飛んで居ました。そして、そこらでピン／＼ビヨン／＼頻りに高飛び、幅飛びの稽古を始めました。さあ姉さんは周章すには居られません。それを抑へ様として、「アラ、オヤ」「アラ

「オヤ」と變竹林な號令をかけながら、指を上げたり、下したりして、いつも蚤が飛んだ後ばかり抑へ廻つて居ります。然しこんな無駄骨折りは長く連続するものではありません姉さんは遂にたまりかねて両手で抑へ付けました。然し姉さんの手は元來機敏でも過敏でもなかつたのです、女中のよりも大きいと、かねて賞められて居た姉さんの兩方の掌で小豆よりも小さい／＼蚤一疋におつかぶせることが出来なかつた、そこで蚤は良い氣になつて、又ピン／＼／＼／＼／＼クンゴダンストかダンゴ踊とかを踊り始めました。姉さんは、「これはたまらん」と両手でパツ／＼と私の方へ向ひて水でもはねかけるやうに跳ね出しました。

かうなると私も狸寝入りでは済まされなくなりました。急に起き上つて亦姉さんの方へ跳ねかへしました。哀れなる蚤はテニスのボール見たやうにあつち放られ、こつちに放られして遂にはどこへそれたか姿が見えなくなつてしまひました。二人はブツ／＼云ひながら枕に頭を付けてしまひました。

蚤よりも一層憎らしくて、いやな奴は蠅であります。眠むらうとして居ると目尻に来る唇に来

る、舌で嘗め廻はす、手でほぢくる。追へども去らず、去つても亦戻つて来る執拗さ。いくら呑氣な支那人でも之れには胃を脱いだと見えて「蒼蠅の賦」といふ名文を作つて蒼蠅／＼吾爾の生たるを惡む」と云つて頻りに長い愚痴をこぼして居ります。尤も支那や朝鮮は蠅が名物で、米屋の米にさへ胡麻を振りかけたほど眞黒に蠅がたかり、昔は二人出會つて挨拶をするのに、先づ顔の蠅を逐ひやつてからでないと、權兵衛やら八兵衛やら見分が付かなかつたと申しますから、確に蠅の名所でありますせう。そんな名所へ行つたら私どもの命は直に縮つて了ひさうに思はれます。尾籠な話ですが便所に行つて見ますと蠅が下の方からブーンと云つて飛び上り、上の窓から外へ逃る。あれが此次には直に私共の御菓子に來たり御飯に止つたり、唇の周圍を嘗めたりするかと思ふと何だか體中が妙になつて、身の毛がよだつて惡氣がして、胸が變になつて、氣持が悪くなつてむかむかして來て、吐物が出さうになつて、目先が暗くなつて、引き付けさうで、お祖母さんの御伴して冥土へ行きさうになつて了ひます。

初めブーン／＼二ツ三ツ内證事のやうに出て居た蚊も、此頃は勢力を揃へて來襲しますので蚊遣

線香では威壓が利かなくなつて蚊帳を吊り初めました。一體蚊帳は私は大嫌ひです。あの中に寝ると、第一氣がつまる様に感じます。それから眠つた後、蒲團の上で自由行動が取りにくい。一寸手を伸ばしても、足を投げ出しても、直に蚊帳の外に出てしまひます。ウツカリ轉がらうものなら、吊り手が切れて四角な蚊帳が三角になつてしまひます。眠い時は誰れだつていやですから起きて吊らうとはしません。三角の中に皆が頭丈け突き込んで居る。朝になつて胡頹子の様に赤く血を吸つた奴が疊の上にコロ／＼。皆は申し合した様にガリ／＼手や足をひつかき廻して居ります。

少し陽氣の變な晩などは皆が芋虫のやうに、ゴロ／＼やつてゐるうちに、蚊が内へ這入つてしまつて、蚊と人間とが全くアベコベになつて騒いで居ることなどもあります。私はこれから思ひついて宵の中に蚊帳の中にすべて蚊を入れてしまつて蚊帳の外に寝る安全法を考案中です。

七、西の濱から

三崎に来て一等困つたのは、米の悪いのとお味噌の不味いのと、井戸のつるべの大いのであります。お米は上等と云つて宅に持つて来て居るのが、東京の五等米位と思ひます。尤も生れてから五等米と云ふのは喰べることがありませんから、確かな證據を握つての話ではありませんけれども、焚き立ての御飯にブンと一種の有り難たからざる臭氣がして舌の上に乗せた時には石灰と鉛と一緒に御馳走になつた様な氣持がします。そして冷えるとポロポロになつてしまつて、砂を嚙むより愛嬌がありません。

東京では烏の鳴かぬ日はあつても、毎朝味噌汁を喰べない日はない位に味噌汁を戴きますから此處へ参りましたも、翌朝早速味噌汁を買に行つておみおつけを拵へました、けれども御飯の時、おみおつけ椀を鼻先まで持つて行つた丈けで皆は互に顔を見合せて誰も唇につける者はありません

んでした。それはおつけが、妙振出しと、中將湯と、虫薬とを一緒に煎じ出したやうな香がして臭き引き込んだが最後、胸も腹も一杯になつてしまつて、翌日の晝までも鼻の奥に其臭氣が這ひずり廻つて居る様な心地がしたからであります。

都で水道の栓をひねつて水を使ひ馴れた私共は、井戸から水を汲み出して、バケツで二十間も先からエツチヲオツチヲ運んで来るのは容易の仕事ではありませんでした。井戸のつるべは、大バケツ一杯以上這入る飛んでもない大形で、それを深い井戸から汲み上げる時は、お尻と腹に力瘤を入れて綱にブラ下る様にしなければなりません。それでもウツカリしますと、こちらの體が軽く浮いて、つるべからブラ上げらるゝ様なことになります。

私共は茲へ來まして最も目につきましたのは、めつちよ、目爛れ、目シヨボ／＼の多いことでもあります。近い所から申しますと、手傳に來て呉れます。老嫗が片目で、向うの店の内儀さんが目爛れで、其隣のお姑さんが片目、それから三軒置いて隣の子供も同じく片目で、其向う側の亭主がシヨボ／＼目、四五軒先の氷屋の女中がまた片目で、其處に來てよく氷水を飲んで居る男が目

爛であります。それから一町許り隔つた旅館の女中に斜視と片目が居ります。それから笛吹いて通る按摩は皆申合せたやうに盲目です。其他道行く人間に双眼揃つて無疵ものを見出すのは容易でなく、大概は謂く付きの半ばものです。だから、土地の名はみさきでも人はめさきの利かぬこと夥しい。

七月十七、十八、十九の三日間は、此處の氏神なる海南神社のお祭りです。此のまたお祭が實に妙テケレツツのパーであります。十七日の夜は私共の町からだしをだしました山車は二間に一間の臺の後半に紙製のドス黒い大岩を拵へ、その所々に造花の牡丹が御愛嬌にあしらつてあります。之を一口に形容して見ますと、禿頭に簪をさしたと云ふ恰好です。前半は上に紅白の布の日蔽があつて、前面に提灯をブラつかせ、正面に國旗を組合せた有様は、お祭に凱旋祝が紛れ込んだ姿です。さて其の中で例のチョコレート人種の怪物連が笛と鐘と大小の大鼓とて、チン／＼、ポ／＼、ヒュードンドンと忙しく吹き立て叩き立てる調子の可笑さは、御祖師様の處に活動寫眞の廣告隊が突貫したと云ふ喜的のです。

さて、之を引つ張るのは、牛でもなければ馬でもない。七八つから十四五迄の男の子です。先づ其服装を見ますと、眞白の晒布の振袖のチャン／＼と云つてもよければ、振袖の長襦袢と申しても差支ない様な奴を素裸の上に羽折り、脊中には赤や桃色のハート形の腰巾着、いや脊巾着をコロつかせ、中には巾着の代りに錫を一枚ブラつかせたのは流石に漁師町のお祭。あれで、猫が飛び着かぬものかと私は聊か心配したが、坊主頭に茜色の鉢巻した彼等はそんなことには氣も止めず、

「頼むぞ若い衆や、若い衆や、」と黄色い聲を頭のギリ／＼から振り上げて、エイ／＼と曳き初めます。けれども、だしは直徑一尺位の松の木を輪切にした車が左右に總て四つ着いて居るぎりすから、ギツチリ、ガツチリで容易に先へは進みません。のみならず道路は凸凹ですから、折角動き出した臺も其處へ鼻を突き込んで、ギヤフン、グシヤン、それをテコでこじ直すので、張紙の岩が臺の上でお尻を浮かして、ガツクリ、シャツクリ、躍り出して、今にも臺から放り出されさうです此の調子で一町も行つたら、大事なだしは腰を抜かしてしまひはしないかと、私の小

さな胸までがだしと一緒に躍るのであります。

十八日と十九日とは、大人がお御輿を擔ぎ出しました。其服装も子供連のと異つたことはありません。黒い體に白い着物、茜の鉢巻をした勢揃へは、南洋あたりはいざ知らず、日本では手易く見られぬ圖です。それが腰がきまらないほど酔つ拂つて、お御輿を擔ぐのですからたまりません。右にユラ／＼、左にユラ／＼、大地震の眞中へ大海嘯が飛び込んだやうな騒ぎです。一足二足先へ進んだかと思ひますと、三足も四足も後へヨロ／＼、タチ／＼、お御輿よりも擔いで居る連中のおみ腰が据つてゐません。

かくてもものゝ三十分も、木遣に合せて、ワツシヨイ／＼揉み合つて居りますが、先へは殆んで進みません。此の調子では夜が明けたつて、御輿は一町も動きさうにはありません。さうする中にお輿の傍で急に別のどよめきが始つて、何やら大聲で怒鳴り立てながら黒い影がよれつ、もつれつし初めました。見ると七八人の屈強な奴等が、鬼の様に荒れ立つ一の赤裸の壯漢をおつ取り巻いてをります。「喧嘩だ、喧嘩だ」と喚く聲が群集を戦慄させました。私共は膽を潰してしまひ

ました、やがて、一人は散々に打ちのめされました。「一體われが悪りいだ」と口々に罵りながら六七人が首や、手足を取つて、動ともすると呻吟きながら跳ね出さんとする奴をズル／＼大路に引き摺りつゝ何處かへ運んで行く有様は恰も人間を鮪扱ひで凄じくも恐しい次第です。

此騒動の済むか済まぬかに、又一人の酔漢が現れました。騒ぎと處分は前と同じ様で、これも鮪扱ひ。お御輿は矢つ張り進まずにあちらへよつたり、こつちへ打つつかつたり、倒立ちをしないばかりです。

「あれでよく神様は腰をお抜かしにならないものですね」と私は身を振はせながら隣の小父さんに囁まもしたら、

「何に毎度の事ですから、神様は平氣です。今年はこれでも一町丈ですから、たいしたことはありません二町が打ツつかると、もう少し騒ぎが大きくなります」と之も平氣なものです。

なるほどこれがほんのお祭騒ぎと云ふのでせう。

八、チヨコレート色人種

冥土へ行きそこなつた私は、命の洗濯をするべく、いよ／＼相州三崎へ参りました。

七月一日午前四時起床、家をヒツクリ返す様な騒動をして、靈岸島發の汽船に乗り込んだのが七時半、隨行を仰せつかつたのは、姉さんと謙(二ツ)ちゃん、春(四ツ)ちゃん及び親戚の〇子さんの女連、三十里の海上を玩具の様な小汽船で渡るのは聊か心細い心地もいたしました。そればかりでなく、汽船は肴積みを専門として居る丈に、人間は頗る虐待の姿であります。

端舟から本船に移るのは、まるで穴倉見た様な船窓を這ふやうにして足を震はせながら中に迂り込むのです。此時大抵の人は氣を吞まれてしまひます。然し兎に角無事に乗り込んだのだから、ヤレ安心と胸を撫で下ろすと大間違で、此處はお魚の船室で、魚の這入つて來た臭氣紛々たる四斗樽が、天井までジツシリ遠慮なしに積み上げてあつて、一人の肩さへ自由にはさせぬと

云つた様なトンネルとなつて居るのです。人間の船室は、其後の一等艙に在るのですから、否でも應でも船客たる以上は此の難關を通過しなければなりません。

所が先が闊へて居て、一寸とソツとは通れませんが、一足運んでは停まり、半歩やつては引つかゝる、停電又停電のトンネル中で、腸に泌み透るやうな魚油の悪臭と、頭がグラ／＼するやうな生温るい人息とを腹が脹るゝほど頂戴して氣が遠くなるやうな心地で先の人のお尻を押し、船室に這入つて見ると、二度吃驚り、天井が低くて狭苦しい上に、魚の悪臭は此處にも満ち溢れて、鯛屋さんの懐に同居したやうで、迎も中には一分間でも居られさうにありません。そこで甲板に上らざるを得ないのですが、其上る處が矢張トンネル式で、そして梯子は電信柱に切り形をつけたやうな直線式、氣の小さなものは、茲まで來ると大抵人間の顔色がなくなつてしまひます。

甲板に上つて、海原を渡り來る朝の涼風に息を吹き返した思ひをしましたものと、日光を遮ぎるテント一つないのですから、甲板に身動きも出來ないほどガツシリ座つた乗客は洋傘も擴げる

譯に行かず炎天下スツカリうだつたやうになつて青息吐息をつかさるを得ざることになつてしまひました。殊に病人の私は、此まゝ冥土へ近まつたやうな思がしました。

所が、少し船が進む内に、此の船客の大部分である書生さん達が苦しがつて、舳の舷側に逃げてしまひましたお蔭で、甲板の風通がよくなりますし、洋傘がさゝれるやうになりますし、一同元氣が出ました。船は頻りに波を蹴りかけながら、藍を流したやうな海を南へ沖へと進んで行く。横濱、横須賀を横に見て、房總半島をボーツと左に眺めつゝ船が愈々進むと、白帆の數が海に殖えて、鷗が悠々と舷を掠めて行くなどは、實に心持が結構過ぎて、前の不快な氣持にお釣を出したい位です。

ですが、世の中は思ふ通りならぬもの、茲に豈計らんや弟思はんやの出來事が突發いたしました。

船は浦賀の沖あたりから外洋の餘波の爲め少々動揺し初めましたが、三崎の手前一里の松葉崎沖へ來ますと、横波を受けて大分グラつき出しました。すると實物の汽船を見るのは、これで二

度目で、産聲を上げて以来船と名のつくものには鹽船より外に乗つたことのないじ子さんが、先づ氣分を悪くして小間物店を初める、續いて姉さん、春ちゃんと一行五人の中三人が病人以上になつてしまひました、後に残つたのはまだ碌に歩けぬ謙ちゃん、病人の私のみです。そこで三人の船最と一人の幼児を何んでもかんでも病人の私が引き受けねばならんことになりました。所が私だつて七十餘日も床にあつた身、衰弱して居て足が十分ではありませんから、謙ちゃんを抱いて便所に行く時などは、船の動搖にスツカリ調子を合せて、三度も甲板で尻餅をついてしまひました。それでは全然地獄へおつこちて行く様なもの、此先どうなる事かと生きた心地もしませんでした。

けれども、ありがたいことには船は無事に港に着いて、私共は三崎町の西南端なる西の濱に漁家と並んだ一軒家を借りて、城が島の燈臺や、波間の漁火や、往く船、歸る帆、入る日、出る月を起て見つ、寢て見つ海の廣き眺めを壇にし、太平洋から打込んで来る怒濤が庭先の崖下を嘔んで白泡を吐くのを興する身となりました。周圍に住む鬼のやうな人間が容貌に似ず、樸訥で、

親切で、正直で、眞實で優しいことは地獄で逢ふ佛の様なのに一同俄かに腹の虫の居處がよくなくなつて、三崎に越す地は日本は愚か唐天竺にもあるまいと云ふことに保險をつけてしまひました。

濱では毎日、朝から晩まで子供がドブ／＼泳いで、日に焼けた黒い岩の上に腹這つて脊を干して居ます。其脊の色の見事さ、赤でも黒でも銅色でも形容が十分ではありません、私はいろ／＼考へた末、チヨコレイト色ならば尤も彼等の色彩に近いと思ひました。實際岩の上にゴロ／＼して居るのを見ますと、チヨコレイト製の人形を並べ立てた様です。色の白い人種を白色人種と云ひ、黄いのを黄色人種、黒いのを黒色人種と呼ぶことを地理で習つた私共は、三崎は前代未聞のチヨコレイト色人種あることを皆さんにお教へいたします。

九、電氣小僧

東京灣通ひの三盛丸が横須賀から東京に向つて動き初めた時は、午前一時を打つたばかりの眞

夜中でした。避暑歸りの乗客が大變多くて、大部分は船室からハミ出して甲板に陣取つたゝめに海面を渡る夜風が濕つぽくつて、手も足も顔も着物もぬれて氣持の悪いこと、とつても眠むることも出来ませんから座蒲團の上に据つて泣きつ面をして居ますと、沖の闇黒の中から、さつと強い光が来て私共の船の左舷を射しました。甲板の上が晝のやうに明るくなります。東京灣警備の軍艦からサーチライトを差向けたのです。すると、傍に居た八歳ばかりの男の子が、頓狂聲を立てました。

「父つちやん、父つちやん。」と其脇に居眠りして居た五十格好の男に申ます。

「何だい。」と父ちやんと呼ばれた男は眠むさうな目を子供の方に向けました。

「父つちやん、ありや何だい。」とサーチライトの光を眩しさうに受けながら云ひました。

「探海燈つてものだよ。」

「あゝあれかい探海燈は。」如何にも驚いた調子。

「父つちやん、あれはどうするのかい」

「敵の船を探すのさ」

「敵の船が居るのかい、此の邊に。」さもビックリした様にとび上つてキョトク。

「馬鹿ツ、こゝに居やしないよ、戦争する時にだよ」

「さうかい、道理で見えねえや。」と安心した顔。

「當り前よ、見えてたまるか。」

「父つちやん。」

「何だよ。」

「あの探海燈はよく光るね。あれは何で拵へてあるかね」

「機械の中に火がともつて居るんだよ。それを廻はすと、あんなに光るんだよ。」

「父つちやんは見たことがある？」

「ウン見たよ。」此の時今まで生ぬるい返事をして居た父つちやんは大きく欠伸をしました。まだ其の開いた口のたゝんでしまはない内に、

「何時見たの。」と曇みかけました。

「煩せいな、去年横須賀でよ」

「どんな火がともつてるの。」質問が面白くなつて来る。

「どんな火つて、ランプの様な火さ。」

「内のランプでも出来るかい。」

「馬鹿ツ、電気だから駄目よ。」

「電気とランプと違ふのかい。」益々奇抜。

「そりや違うさ、電気は電気、ランプはランプぢやないか。」

「ランプで電気は出来ないの。」

「出来ないよ。針金を引張らなけりや駄目だよ。」

「電気は針金かい。」いよ／＼質問が鋭くなる。父ちゃんもタヂ／＼の姿。

「針金ぢやないが、針金をつたつて来るのよ。」

「何處から。」追窮甚だ急。

「煩せえなあ、電気の會社からよ。」

「會社で電気の油を作るの」

「油ぢやないよ、煩せえ子だなあ。」

「煩さかないよ、聞いて居るんだよ。油ぢやないの。」

「電気元は神鳴様だよ」

「神鳴様、恐いね。」子供は目玉をむき出して父つちやんの顔を穴のあくほど見つめながら、

「會社に雷様が居るのかい。」

「會社の人は矢張り人間だよ。」

「人間が雷様を拵へるの。」

「あゝさうだ／＼、あんまり煩いことを云ふとお臍を取られるぞ。」と父ちゃんは逃げ道を作ります。

「だつて雷様には云つて居ないんだもの。」

「雷様に云はなくなつて、煩い奴の胸が一番好きだよ雷様は………」

「父つちやんも取られたかい。」

「おれは取られやしない、煩いことを云はねえもの。」

「だつて母つちやんがねえ、父つちんは酒を飲むと煩さいで困ると云つてたよ。」

「何を云ふんだい。やかましい奴だなあ。」

「だつて、學校の先生は分るまで聞けつて云つたよ。」

「父つちやんは學校の先生ぢやないよ。」

「學校の先生と雷様とはどつちがえらいの。」電氣小僧なか／＼味なことを云ふ。

「本當に煩いなあ、見る人が笑つてるぢやないか。東京の伯父さんそこへ行つて煩さいことを云ふと聞かねえぞ、おとなしくしろ、おとなしく。」

「東京の伯父さんも電氣燈かい。」

「馬鹿ツ、東京に行つてそんなこと云ふときかんど。」

「それでも大きい姉さんが東京の伯父さんは随分な電氣だつて云つてゐたよ。」

今まで父子の珍問答を面白がつて傾聴して居た連中も遂に腹を抱へて笑ひ出した。子供は何事か起つたかと云ふ顔付で、キョトンとして皆と父つちやんの顔を見廻した。

10、庭のワツシヨイ

春過ぎて夏來にけらしの頃となりますと、何だか體がだるくて、籬がゆるんだ様な氣持がします平生さへありまり籬がしつかりして居ない所へ、時候の加減で緩み出すと取り留めがありません。

春眠曉を覺えずとか云ふことがあります。春眠でなくても曉などを覺えたためしがありません。此頃と來た日にやお話になりません。噺と噺と同盟し、枕と頭と妥協し、夜具と

體とが同心一體になつてしまつて、カア／＼とが鳴き出してもガラ／＼車が通つても、豆腐、納豆やお花屋などの青い聲や赤い聲、濁つた聲や澄んだ聲が天地に満ちて、夜が明け、日が出て臺所で御飯の焦げつく臭がブン／＼しても白河夜船で、優しくつて女らしい駢をかきながら寝飛ばしてしまふことが、私には度々はありませんが、お隣のC子さんなどにはよくあります。

今週はいろ／＼宿題が出ましたが、今日の日曜を當にして、土曜も遺憾なく遊び暮してしまひました。實は今朝こそ早く起きて仕事を片づける覺悟で、五時に目醒しをかけて、晩も早く寝ましたけれども、なか／＼思ふやうには奈良の大佛。朝になると時計がチリン／＼鳴つてやかましくてなりませんから、止めて置いて、モウ十分、モウ五分、モウ三分と牛のやうにモウ／＼と引き延ばして居るうちに、つい寝込んでしまひました。

かうなると、時計と云ふものは、意地が悪くて、現金的で、一向融通が利ないもので、一度止めたが最後、二度と鳴りません。鳴らないから目が覺めません。目が覺めないから日が高く上ります。日が高く上りますから、お母さんから怒鳴られます。怒鳴られますから不愉快であります。

す。

一年の計は元旦にあり、一日の計は朝にありとか何とか申しますが、全くで、こんなに朝の計が違ふと、終日うまくまわりません算術をして見ますと、ほんの少し式が違つたばかりで、飛んでもない答が出ます。地圖を書いて見ると鐵道線が脱線して、汽車がヒマラヤ山の天邊から印度洋に飛び込むことになつてしまひました。こんな時には何をしたらつて碌なことは出来ませんから、私は心氣一轉の必要を感じて庭へ出ました。

庭には初夏の日か可なり強く輝いて居ります。二三日前の雨で、小さな草があちこちに萌え出して居ります。其草でも取つて見ようと、腰をかゞめて見て、ふと目についたのは一疋の蜻蛉が死體となつて横つて居りました。病死か、餓死か、頓死か、他殺か、自殺か其邊は確かに見別がつきませんが、目をあけたまゝきら／＼光らして死んで居ります。然し別に物凄ごい感も起りません。それから人間の死顔といふものは、氣味が悪いものですが、蜻蛉の死顔は生前と少しも變りがない、つまり生と死との間に人間ほどの距離がないやうであります。

あゝ人間の死と云ふと、今思ひ出しても、ソツとします。私が田舎へ行つて居た頃、女の身投げて居るのを見た事がありますが、その氣味の悪い顔付が今でも目の前にチラ／＼します。ですが其時の疑問が未だに解けないことが一つあります。村の人々は其身投を見て、「土左衛門だ、土左衛門だ」と申します。女を捕へて土左衛門は可笑しく思ひましたから、知つたかぶりの兄さんにさう申しますと「女を土左衛門と云つて何の不思議もないさ、赤染衛門と云ふ立派な女があるぢやないか。」と。成程尤もです。然し、まだ疑問があります。「水で死んだのに土左衛門とは聞えません。水で死んだのは水衛門、土中で死んだが土左衛門ではありませんまいか」と申しますと、兄さんは、

「世の中はさう杓子定規に行くものでない、土をほじつても水飲百姓と云ふが如しさ。」と笑はれました。

土左衛門論で、話が横道に入りましたが、蜻蛉の死骸の傍に一疋蟻がノコ／＼出て來ました。彼は長い二本の觸角を左右に振り立てながら立ち止つて首を傾けた。それからやがて大急ぎで死

骸に向つて進みました。觸角が大きな死骸に觸れると、彼は驚いた顔つきをして足を止めた。然し私共が死人にぶつつかつた様な驚きではなくつて、獲物の大きいのに驚き且つ喜んだ顔つきであります。

さて、彼はどうするであらうかと、目を離さないで居ると、蟻は尙ほ進みよつて横つ腹に喰ひ付いた。それから後足に力を入れて一生懸命に後へ曳いて見た。けれども、死骸は貧乏ゆるぎもしない、場所をかへて二三度曳つ張つて見ましたが何の齒答もないので、彼は斷念して、其周圍をクルリと一廻りした。そして尻尾の方から上へ這ひ上つて其頂上から四方の景色を眺望して、ニツコリしました。賢明なる蟻君は獲物の大きさと高さとを測量したのであります。測量を終へた彼は、下に降りて元來た途へ引き返します。六本の足を動かせるだけ大急ぎに動かして、ヒョロ／＼走ります。此の速力一秒一寸であります。一分六尺、一時間に一町のレコードであります。此頃の國際畫報を見ますと蟻の速力は一時間に〇哩〇〇七とあります。頭の悪い私にはこれが何町何間に爲るのやらサツパリ見當がつかまぜんから、そこらのお暇で賢明なる方に暑中休暇の宿

題のお手序に換算をお願いいたすことにしまして話を先へ進めます。ヒヨロ／＼走つた彼の蟻は庭石の脇を廻つて、植木鉢の並んだ横町を抜けて落葉の下を潜つて、一間ばかり隔つて大きい櫻の木にある米粒大の穴の中に入りました。入つたかと思ふと、二三疋の蟻がぞろ／＼と穴から出て來ました。其後から吐き出される様に無数の蟻が出て來ては一線に黒筋を引いて續いて行きます。道案内は最初の彼の蟻であることは申すまでもありません。先登は早くも其の周囲に集りました。そして或は頭にかちり付く、或はどてつ腹に喰ひ下るのも、或は尻つほを引つ張るのもあり、頻りに運ぼうとして居りますけれども、容易に動きません。其内に繰り出されたる蟻の軍は、黒胡麻をかけた様に蜻蛉の死體に喰ひすがつて、ワツシヨイ／＼と動き初めました。

大勢の力と云ふものは誠に恐しいもので、あの大きな蜻蛉が此の小さき者共に何の苦もなく運ばれますけれども其中には頓馬な奴が居て反對の方向へ一生懸命に引つ張つたり、死骸の上に乗つて居ながら、自分も引いて居る積りで喰ひ附いて足ばかり動かして居る奴があつたり。神田明神の御輿を擔ぎ出したよりも面白味がありますので、見とれて居ると、向うの垣根に唯事ならぬ

猫の叫び聲が聞えました。

何事ぞと、驚きながら目を轉じますと、隣の黒と内の白とが大喧嘩を初めた所でした。黒は體中の毛を針鼠の様に立て、耳をサツと後へ引きつけて目尻を吊り上げて齒をむき出した工合は天晴の武者振ですが、頻りに黄色いヘコタン聲を立て、居ります。白は敵を尻目にかけて脊中を餓頭形に圓く高くしながら、長い尻つほを脹らせるだけ脹らして、恰も征夷大將軍の帚木鞘をお尻に提げたと云ふ格好で、時折オリーブ色の聲を張りあげて居ります。

「こらツ」と大聲でどなりますと、黒は白に援兵が加はつたとても思つたか、ニヤンとも云はず、尻つほをまいてコソ／＼逃げ出しました。

白は拍子ぬけの體でアツケラカンとして尻つほをたゝみながら、グル／＼喉を鳴して近づいて來ました。

蟻は大きな獲物を頭高く擔ぎ上げて、相變らず、ワツシヨイ／＼動かしながら、もう住家近くに行つて居ります。

一一、飛んだ信神

今日は朝から植木屋が三人来ました。一體植木屋と云ふのは香氣な商賣と見えて、少しばかり植木の手入れしたかと思ふと、縁側に腰を下して煙管を取り出して煙草を吸ひながら、世間話を始めます。

「おらねえ。此頃つく／＼酒は飲むものぢやねえと思つたよ。」と五十格好の頭の禿げ上つたドン栗眼で安座つ鼻の一寸見には人相の餘り面白くない、併しよく見ると薄あばたが顔中に皺を作つて何處となく滑稽で愛興のある甚さんは、年若い熊さんと金さんに向つて、かう云ました。

「どうかしましたねえ」と金さんは甚さんの方を向く。

「どうかしましたつてお前。酒は百薬の長だなんて、云ふが全く當にならねえや。慎しむべきは色と酒だつて云ふぢやないかねえ。話はかうだ。お前達にはこれからあることだ、よく聴いと聞き

ね。」えと甚さんは唾を飲んだ。

「つひ五六日前のことだ、仕事は暇だ、天氣はよし、暑くもなければ寒くもない、今日の様なお天氣だと思ひねえ。當り前の人間だと、博覽會でも見物に行かうつてんだが、そこは變り者だ。おらあ博覽會が法螺の貝か知らねえが、そんなものは一切大嫌ひだ。人込みに揉まれて足埃を吸つて美しいの綺麗のと騒いだつて何の絲瓜にもならねえや。それよりやあ堀の内のお祖師様にもお参りして、歸りは飲み仲間の四谷の久兵衛の内に寄つて久振りだ、一杯てなことを考へると矢も楯もねえ、思ひ立つたが吉日と内を飛び出して、電車に乗つたと思ひねえ。

文明とやらの世の中は有り難えもんだ。深川から堀の内と云やあ四里からの途だ。昔の様にテク／＼やつた日にや往復一日仕事も樂ぢやねえが、重寶なのはチリン／＼動きますだ、梯子を寝かしたやうなレールの上を一直線、四谷見附までは煙草二三服の間と云ひたいが、さうは行かねえどの位かゝつたかは時計に限ると、懐中から時計を……」

熊「一寸親方、お前さんは時計を持つて居ますか。」

甚「まだ話の途中だ、後を聞かぬえで、話の先廻りをするな。時計を出さうと思つたが、元來時計なんてあんな下らぬえものは買つたことがねえ、無くつたつて鳥が鳴けやあ夜が明ける。寺の鐘が鳴れやあ夜になる。ドンが鳴りやあ晝飯だ、憚りながら時計なんぞの厄介になる男ぢやねえんだ。そこで出さうと思つたが、おらあ出さぬえんだ。」

金「だつて、無けれや出さうと思つたつて出せないだらう。金さんは混ぜつ返します。」

熊「いゝや持つて居たつて、出ねんだ。だが、そこは物の道理の分つたおらだ。人の時計に難癖をつける様なケチなことはしねえ。嘘にもお世辭を云ふこともあるから隣に居た商人體の男に

「生憎時計を忘れましたが、お前さんのは今何時でせう。」とかう尋ねたんだ。すると、向ふの返事が氣に入つたねえ。

「生憎時計を持合せて居りません」と云ふんだ。此方も生憎なら、向ふも生憎だ、こりや話せる男だと思つたから、

「お前さんも矢張り時計が嫌ひと見えますねえ」と話の緒を繰ると、癪に障るぢやねえか、

「さう云ふ譯ではありませんが……」と頭を掻いてモジ／＼し上るんだ。時計がないのを耻の様に思つて居あがなんだ。意氣地のない野郎だと思つたが、喧嘩したつて始まらねえ、チツト腹の虫を抑へて四谷見附を過ぎて、停留所を一つ越えると電車はパツタリ留つた。

客もないのにグヅ／＼し上ると思つて、車掌に「早く出さぬえか」と云ふと、

車掌「停電です。」と云ふんだ。

「停電でもおでんでも構はねえ、おらあ先が急ぐんだ、早くしてくんねえ」と云ふと、

「停電だからしやうがない。手も足もでん」とへらす口を打ち上るから、豈夫れ癪に障つて、

「べら棒奴、人を馬鹿にし上るない。そんな停電なんかに乗らないでもいゝんだ。かうした立派に親譲りの足を二本揃つて持つて居るんだ。右と左を代り番こに前へ出しさへすれば、否應なしに二里でも三里でも行つて仕舞ふんだ。貴様達の厄介にはならねえ」と痰呵を切つて飛び下りると、丁度久兵衛の横町の處だ。實は久兵衛の内は歸りにしようと思つたんだが、茲に下りたのはこりや神様の引き合せだ、神様の引き合せとあつて見れば、一寸戸口からなり聲をかけて行くが

順だと思つて、横町へ這入つて、『御免よ』と八軒目の格子戸をがらり。

『やあ久し振りだ。まあ上んねえ、立つて居ちや挨拶も出来ねえ』と云ふ處へ奥から飛んで出たのは、誰あらう久兵衛の嬬だ。

『これは又お珍しい御入來、そこは端近かいさ先づこれへ、すつと御通り召され。』と云ふ。あまりすつと通ると裏へ抜けてしまふんだが、そこは内の脹れつ面などゝ違つて云ふことがおつて愛嬌だ、挨拶が氣に入つたから、

『然らば御免』と上へあがり込むと、嬬めはお茶も出さずに、コソコソと何處かへ抜け出した。おらあ其時さう思つたねえ、女と云ふ奴あ油斷がならねえ口の先ちや甘いことを云ひ上つたが、又飲まれちや大變だと逃げ出したな、腸の腐つた、野郎だ、よし／＼そんな了見なら久兵衛の爲めにならねえから、嬬不信任案を提出しようと思つて居ると、又ヒョックラ歸つて來た。見るとニコ／＼して人を馬鹿にして居あがるぢやねえか。いよ／＼癪に障るから、睨めつけて何をし上るかを見て居ると、脹らした前垂の下から取り出した物は何だと思ひなさる。

逆も金公などには見當のけの字もつくめえ。憚りながら一升徳利だ。その一升徳利を前に据えて、言草が氣に入るぢやねえか。

『深川の親方は、木の葉の煎じからしは駄目だから、米の汁癪酔劑にしましたよ』つて、天晴れな嬬だ、おらの嬬などは足下にも寄り附かねえ、物事は總てかう出なくちや嘘だ。それから爛をつける肴を出す、差しつおさへつ二人が飲むうちに、當節の一升は誠に量がない、直に徳利が倒さになつてしまつた。これは心細いと思つて居ると、嬬は徳利の首を無雜作にヒツ掴んで飛び出して又一升さ。新手の瓶子とありや酒戦も面白い、勇氣百倍して大盃を傾ける内に又々一升徳利がヒツクリ返る。

すると嬬奴が又飛んで行つて相變らずの始末。茲に一升徳利三本枕を並べて名譽の戦死をしたと思ひねえ。如何なる大將も全く參つてしまつたが、どんなに酔つたつて本性は失はねえ、お祖師様のことが氣にかゝるから、いい加減に切り上げて、……』

熊『その位やれあいゝ加減でもあるまいよ』

甚「まゝいゝから聞いておれよ」

七〇

『勝負は何れ他日に譲らう』てなことを云ひながら、ヒョロつく足を踏みめながら表に出るとこいつはしまった、日が暮れて居る。かうなりや仕方がない。御祖師様には御免を蒙つて略式ながら茲で遙拜をしようと、彼方へ向ひて、手を合せて、

『お祖師様、お祖師様、時既におそし様でござれば、折角でげすが今日は縁がないものと御勘辨を願ひます。いづれ又暇がありましたらお目に懸つてお詫びを申します。嬢もよろしく申しましたと事明細にやつたんだ。』どうだ甘いだらう。』

『それからブラ／＼歩いて内に歸つて見ると、嬢の野郎は戸をめて寝てけつかるから、癪に障るぢやねえか、』

『オイコラ起きねえか、宵の中から寝る奴が何處の世界に在るか間拔者』と怒鳴りながら、ドン／＼力に任せて戸を叩くと、奥の方から、

『誰だへ、夜更けて戸を叩きなさるの』と寢惚けた聲で戸を開けるから、

『誰もあつたもんだ、おれぢやねえか、間拔め。』と内に這入ると、隣家の八兵衛の家だ。

『これは飛んだお門達、何れお禮は改めて』と吾ながら可笑しいほど面喰つた挨拶を置土産に下駄を穿く暇なく足袋跳足のまゝ家に歸りは歸つたが、そのきまりの悪さ、話といふのはよつて件の如しだ。アツハツハ……と庭一杯に笑ひ聲。

一一、あわて者

『火事だ、火事だ』と叫び立つる聲につれてチャン／＼とけたましい半鐘の響が深夜の暗をつん裂いて蒲團の中の暖い夢は破られました。眞先に飛び起きた兄さんが、雨戸を繰つて見て、

『大變だ／＼、青木さんが火事だ』と大音聲。青木さんは一軒おいた向隣です。

『それッ』と私共は無我夢中に飛び起きました。寢巻など脱ぐ暇はありません、直に枕元に脱いで置いた着物を取つてヒツ掛けます。胸はすり番の鐘以上にドキンヤキして、急いで着物を着よ

あわて者

七一

うとしますけれども、どうしても手が袖に通りません。不思議だと思つて見ると、着物かアベコペになつて居る。あはててヒツクリ返して手を通しますと、此度は先が行きづまりになつて居りますどうしたことかと頻りに拳を振り廻はして見ると、出ないも道理袂の底に手先が頭を突つ込んで居ります。さうかうする中、ヤツとのことで両手は通つたが、今度は帯が足や手先に捲き着いて肝腎な腰にはなか／＼捲りません。

すると、バタ／＼物の燃える響、ドタン、ボタンと荷物を投げ出す音、叫ぶ、喚く、怒鳴る聲が胸を押し潰す。私はいよ／＼ポーツとなつてしまつて、帯は半分引き摺り／＼彼方へうろ／＼此方へうろ／＼、

「お嬢様、お嬢様、早くいらつして下さいまし」とお竹が頻りに黄いろい聲を振り立て、居ります何事かと駈けつけて見ますと、尻つびり腰になつて襖にしがみ附いて居ります。驚いて、

「どうしたの」と尋ねますと、

「どうもいたしません、足が利かなくなつてしまひました」と震へて居ります。

私「腰が抜けたの」。

女「腰は着いて居りますけれども、足が早く助けて下さいまし」、大きな聲に泣き出します。

そこへ兄さんもやつて来て、

兄「何だ動けない。間拔な上に腰まで抜けたのか」

女「いえ。そんなに皆な抜けたんでは御座いませぬ。何かお薬はございますまいか。アーンアーン」。

兄「腰抜につける薬はあるものか。どれ己がなほしてやる」と云ひながら後に廻つて續け様に腰のあたりを二つ三つひどく打たれますと。

女「あ痛ツ、あ痛ツ」と云ひながら飛び上つた拍子に、「オヤ直りました」と立ち上りました。

愚圖々々して居る場合でありませぬから、先づ自分の部屋に駈け込まうとする途中、次の間から飛び出した者と鉢合せして、目から火が出ました。その火の光で見ると纏がけに身を固めた姉さんです。

姉「何を周章しゅうしょうてるんです。しつかりおしなさい。痛いぢやありませんか」と姉さんは目の上を抑へながら剣突けんつを喰はせます。こつちだつて相當に痛いんですのに姉さんは自分ばかり痛い様に叱しられますから、

私「姉さんが勝手に人の前に頭を持つて来たんぢやありませんか。人ばかり悪い様に云ふものぢやありませんよ」と云ひく見ますと、姉さんの背中にビラ／＼したものがさがつて居ります。何だらうと目を注ぐと、よく／＼狼狽ろうたいたものと見えて、前垂の襷たすがけですから、

私「姉さん前垂まえだりなんか背負つてどうなさるの」。一寸からかつて見ますと。

姉「餘計なお世話ですよ。御自分は何處へ帯おびを結むすんで居るんです。」と謂はれて見ると、これはこれは、先刻帯せんこくおびをする時、いやに手がしやちこ張つて動かないと思つたのも尤も、羽織の上から袂たもとぐるみ締め込んで居るぢやありませんか。けれども今更締め直すす猶豫うゐもありませんから、其儘御免蒙つて自分の部屋へやに飛び込んで見ましたけれども、何をどうしたらよいやら一寸見當がつきませんから、好い智恵を借りようと取つて返して兄さんの部屋へやに駈かけ込みます。

兄さんは向鉢巻むかひまきで、仁王様にわうさまの様な御面相ごめんそうをして泡を吹きながら死物狂しぶつくるになつて、大きな本箱ほんせきを引き摺り廻して居る最中さいちゆうですから、私も早速本箱ほんせきにしがみ着いて、ワツシヨイ／＼やつて居りますと、

姉「本箱ほんせきなんか後あとでもいゝぢやありませんか、箆たんすを早く出して下さい」と姉さんは狂氣きやうきの狀態。

「皆な何をして居るんでせうね。そんなに飛び廻つてばかり居ちやしかたがないぢやないの。早く箆たんすの中の物を出して風呂敷ふろしきにお包みなさい。どうも若いものは役に立たぬ。鈴さん、お竹、お竹、鈴さん」と叫び立てゝ居られますから、私は兄さんを置去りにして、早速お母さんの所へ駈かけ込みますと、

女「はいく、何か御用ごようでございますか」と女中も出てまわります。

母「御用ごようもないもんだ、早く風呂敷ふろしきを持つてお出で」。

女「はい」と答へてまご／＼して居るお竹を見ると、これは驚いた、何時の間いつの間に用意よういをしたので

せう。お竹は大風呂敷を背負つて、その上に自分の洋傘や、番傘や、下駄や草履までブラ／＼括りつけて居ります。まるで氣違ひの乞食見たやうです。然し此の突差の間にあれ丈の荷造をして下駄や草履まで取り揃へたお竹の敏腕には呆れるより外はありません

お竹は、「早く／＼」とせき立てられて、大包を背負つたまゝ襖に突き當つたり、柱にブツ突つたり、風呂敷包と一緒になつて轉つたりして居ります。

時に向の間やら春ちやんと健ちやんとが此騒に面喰つて、ワー／＼泣き立てる聲が聞えます。

「早く行つてごらん」とお母さんに叱られて、行つて見ますと、お父さんは、

「泣くんぢやないよ。今お提灯を點ますよ」と云ひながら二人の傍で盛んにマッチを摺つて居られます。

私「お父さま提灯はどうなさいます」と申しますと、

父「こんな時は周章てるど駄目だ。提灯をつけて置かないと電燈が消えたらどうする。どうも若い者共は氣が利かないで困る。周章ると怪我をするぞ」と云ひつゝ、一生懸命マッチを摺つて居ら

れます。けれども、マッチ箱の紙が破れても烟は出はしません。それもその筈、マッチ棒の尻を摺古木になるほど摺り着けて居られるのですもの。」

私「お父さん、それはアベコベですよ。螢ぢやなし棒のお尻から火は出ませんよ。」

父「餘計な指圖をするものぢやない。一寸試しに摺つて見てるんだ。さう周章ちや駄目だ」。誰が周章て居るのか吹き出さずには居られません。」

「私だつて火がつかなきや駄目ぢやございませんか。」

父「まあ騒ぐな、騒ぐな。急げば事を仕損ずる」と、今度は棒を取り換へて、二度、三度摺られますと、ポーツと火が出ます。「やれよかつた」と胸を撫で下して居ますと、餘り急に火を蠟燭に移さうとされましたので、風に當つて火が棒の先に縮こまつてしまひました。さあ困つたとお父さんは手を被せたり、棒の頭を下へ向けたり、いろ／＼苦心をされた効もなく、火はいよ／＼緊縮主義とかを取つて黒い頭の中に引込んで白い烟を名残りに消えてしまひました。

お父さんは一つ舌打をして、又棒を取り出して火をつけ、此度は最初から用心して蠟燭に持つ

て行つて火を移しながら、

父「これで大丈夫だ」と底に差して、口の所を引つ張つて提灯を伸ばしながら立たうとなされま
すと、蠟燭の火は又風に煽られてユラ／＼と揺れながら消えてしまひました。

「父エー糞ツ、此提灯は駄目だ」とお父さんはブツリながら又躓まれます。いま／＼しいこと實
に夥しい、丁度運動會の提灯競争に出た校長先生が、ビリツコに残つて、マッチを摺つたり、消
したり、提灯を持つて立つたり、踊んだり、マゴ／＼して人に笑はれなすつたと同じ様に可笑し
さが通り越して氣の毒になつてしまひました。

所が、表の騒がいくらか鎮まつた様に思はれて、「もう大丈夫だ。」と叫ぶ聲まで聞えますから私
は外へ出て見ますと、火事場はよく水が廻つて、火は全く下火になつて居りますから、私は直に
内に駆け込んで、

「もう火事は止みましたよ。大丈夫ですよ」と觸れ廻りますと、お父さんは、空提灯をブラ提げ
て立つたまま、

「だから周章るなと云ふのだよ。提灯を點けないでもすんだ。」

一三、明るい心の持主

私共の心が明るいのを好み、暗いのを嫌ふのは先天的だそうです。之が心の善である證據でも
あるさうです。

夜になると暗くなります。暗くなるから不愉快です。ケジ／＼が出る、狸が出る、お化が出る
幽霊が出る、強盗追剽が出る、百鬼横行、千魔闊歩を致します暗いからです。東の方がポーッと
明るくなる、鶏が歌ふ鳥が叫ぶ、花が笑うて次第に下界が明るくなつて来る、やがて黄金の雲を
破つてニコ／＼顔の太陽がバツと輝き出づる。さすがの豚君も大きな欠伸を藁の中でしながらム
ク／＼と起き上つて、汚れた鼻を前に突き出し、「ヴィ／＼、何かないかい」と云つた顔付の陽氣
なこと、同じお寺の鐘の音でも朝聞けば心が勇み、晩聞けば氣が沈む、學校の授業が朝から始ま

りお寺の葬式が夕方始まる所以です。

雨が降る日は天気が曇る。曇ると不愉快です、こめかみに梅干をはる天気豫報頭の持主でなくとも降つたり曇つたりは大嫌ひ、雨は陰気で心までも暗くなるからです。併し日が照りながら雨が降るのは決して不愉快ではありません。此の日の照り雨には、狐の嫁入する日でお目出たいからでせう。

同じクラスメイトでも明るい心の持主と、暗い心の所有者とがあります。同じ小説の中にも夏目先生の坊ちやんと、不如歸の浪子さん見たやうに暗いシンボルとがあるのと變りはありません。

Mさんのやうに明るい人がクラスの中に居りますと、いつもお天氣の如き陽氣さが全級に漲ります。朝から晩まで雲雀のやうに歌ひ、栗鼠のやうに跳ね廻り、絶えずキヤツキヤツとはしやぎ返つて居る人は幸福そのものゝやうです。

學校では冬の寒い時になると、保温器でお辨當を温めます。蔭で私共はホヤ／＼の熱い晝食を

戴くことが出来ます。或日のこと例の如く十二時の鐘が鳴つて、授業が終るや否や先を争うて保温器から辨當を取り出して皆がバクついて居ますと、Mさんだけは辨當箱を頻りに上にしたり下にしたり、机の角で打いたり引つ張つたりして居られます。

「何をしていらつしやるの」

「蓋がくつついて離れないの」顔を眞赤にしながら苦心慘憺です。皆も一方ならず同情して、どれ私ごと移り變り打いたり振つたりして見ますけれども、中で何やらコト／＼變な音がする丈で鳥の嘴を啣へた蛤と同様イツカナ口を開けません。サー困つた、皆がMさんと辨當箱とを取巻いてガヤ／＼騒いで居ますと、心の明るいMさんは、

「いゝわ、理科の先生ならキツと開けて下さるだらう、」とお辨當箱を抱へて、御晝食中の先生の所へ飛んで行かれました。

「どうしたんです」

「蓋があかないんです。先生一寸あけて下さい。」

「さうか、どうれ……。」と箸を置いて、御飯を噛みく／＼力に任せて開けやうとなさるけれども、依然として一旦結んだ口はゆるみません。

「これは變だぞ、」と手工用の金槌で打いて御覽になりますけれども、身と箱と口が其處此處凹んだり歪んだりする外何の手答もありません。

「これは駄目だ。熱の力でアルミニウムが膨張したんだよ。」と金槌をお投げになります。

「さうでせうか、理科辭典にはないでせうか」

「さうさね、見たことないなあ、熱の冷めるまで置くより外に方法はないだらう。」

Mさんは考へました。冷めるまで置くとすれば御飯を喰べる時間がなくなる。さうすれば腹が減つて次の時間の體操に目か廻つりさう。まゝよ、家事の先生に御顔ひして見たら、よい智恵があるかも知れん。お辨當の問題を理科の先生に持つて行つたのは少々早計たつたと氣がついて、急に元氣づいてボールのやうに跳ねてT先生の所へ参りました。

「先生、済みませんが、これを開けて下さいませんか。」金槌で打たれてデコボコになつた辨當を

先生の鼻先へ持つて行きました。驚いたのは先生です。

「これは何ですか」

「お辨當でございます。」

「へーい、大變妙な格好ですね、」「打いたのです」「打いたから開かんのですよ」

「イーエ、開かんから打いたのです。」

「さうですか、迎もこれは開きさうにありませんよ、理科の先生にでも頼まなくちや」

「今願ひして見たのです。」

「男の先生がお出来にならんのに、どうして女が出来ませう。十年も家事をやつて居ますけれども、こんな問題にブツつかつたのは初めてよ。駄目ですわ、一寸手をかけて二三度動かして見て下にお置きになりました。Mさんの顔にはあり／＼と暗い影がさしました。けれども考へました。そしてかねて主任の先生のおつしやつて居ることが不圖胸に浮んで來ました。「何でも困つたことがあつたら相談に來なさい。私は必ず相談相手となつて、あなた方の爲めに全力を盡して上げま

すよ。」さうだ、主任の先生かいらつしやる、きつと開けて下さるだらう。彼の女は又急に明るくなつて主任のK先生の前にまゐりました。

「先生、どうぞ開けて下さいませ。どの先生に御願しても駄目です。泣きたくなつてしまひます。」

「それや困りましたね。どうして開かんでせう。」と當惑顔。

「理科の先生は熱したから開かんとおつしやいます。家事の先生は打いたから駄目だとおつしやいます。原因は分つてゐますけれども開んのは同じです。」

「成る程、面白ね、」と感心してお仕舞ひになる。

「所が面白くないのです。腹が減つてしまひます。」とMさんは泣き出しさう。

「これは弱つたなあ、どれやつて御覽ん。」先生は取り上げて、蓋の所を両手で持つて力に任せて強くお振りになりました。すると、今まであちこち持ち廻つて熱が冷めて居たお辨當は、一たまりもなく蓋から。離れて、バツタリと音を立て、床の上にしたゝか投げ出されました。

「アツしまつた」と先生が叫ばれた時はもう遅かつた。床の上には御飯と豆と昆布の煮物が一緒になつてそこら一面ぶち撒かれました。Mさんは呆然として、暫しは先生の顔とぶち撒かれたお辨當とを等分に見くらべて居られます。

「済まなかつたね。御免なさい。私のお辨當を半分上げよう。」と先生はさも氣の毒さう。

「ありがとうございます。でも先生いゝんです。」

Mさんの顔は急に輝いてニツコリしました。

第五時間日の鐘がカン／＼と鳴る。

一四、雨中奮闘録

昨夜から降り出した雨は今日になつても止まない。嵐までが彌次馬となつてまぜ返すので、雨はいよ／＼勢づいて横なぐりに降つて居る。こんな時は學校に行くのが誠に厭でなりません、か

う申しますと、如何にも怠けものゝ様に聞えますが、其實大の勉強家で頭痛がする時より外、學校は唯の一度も休んだことはありません。どう云ふものか私は生れぬ先からの頭痛持ちだと見えて、蒸暖い雨降り前などにはよく頭痛がします。頭痛と申しても普通一般のありふれた平凡なものと違つて脳味噌の中に心臓が飛び込んで革命騒ぎでも起したかの様な痛が來るかと思ふと、ポンのクボの奥の方に鳴動が起つて磐梯山ではないが頭が爆發して噴火口でも出來はしないかと心配する時もあります。之をお醫者様に話しますと、「どうもそんな頭痛つて聞いたことがない。面白い頭痛だ、」とお笑ひになります。お醫者さんは人の事だから、面白いか知りませんが、私は一向面白くありません。笑ひ事ぢやないのです。こんな時には學校などへ行ず一日よく寝ますと、妙に直つてしまひます。それだもんですから、兄さん達は「怠け病だ」と申します。然し決して怠け病ではありません、其證據には、こんな雨風の時は、頭痛でもすればよいと寢床の中に居る時から願立して居ますけれども、ちつとも頭痛のづの字もいたしません。返つて頭が軽くなつていゝ心持となります。實につむじ曲り頭痛であります。

ですから止むを得ず、仕度をして居ますと、クラスメートのF子さん、Y子さん、M子さんは善し悪しなもので、誘つて下さらないと、「皆さんも今日はお休みだから」と、缺席の理由が立たないことはありませんが、誘つて戴いて見ると、どうも其邊の融通が誠にその何で……仕方なしに私も濡れる覺悟で出て見ますと、皆さんもレインコートに身をくるんで居るものの裾の方はビショ〜です。

「大變ですわねえ、」と申しますと、「F子さんは、

「ほんたうに閉口よ、こんな時は赤ん坊か、お婆さんに限るのよ」

「なぜ」

「なぜつて、學校に行かないで済むぢやありませんか。」

だつて今更赤ん坊にもなれないし、と云つてこんなに若くてお婆さんになるのも厭ですわ」

「だから仕方がない、行きませうよ」

と空元氣をつけて、門を出ますと、ふと目についたのは、Y子さんの腰の周囲です、レインコートの下が馬鹿に脹れて、突起物が出来て居りますから、

「Y子さんの脊中のは何？ 胸が後へ廻つて出店を出したやうですよ」

「だつてこんな天気にはこれに限るのよ、手なんかにつけて居ちや、風から傘もお荷物もひつたくられてしまひますよ。」と云ひながら私を見て、

「あなただつて前の方に括り着けて居るぢやありませんか、随分脹れて居てよ、お尻がお腹へ出張所を拵へた様に。」とY子さんが云ひ出したので、皆さんも笑ひながら、

「こんなお天気に出店を作つたり、出張所を拵へたりして、本店がひつくり返らなければいいけどもねえ、」と云ひく、雨風を冒して、傘をすぼめて、やゝともすると吹き飛ばされさうに腰をふらつかせつゝも足を踏み占めく、とある曲り角の所まで來ますと、サア大變。

牛乳屋の看板を蹴散らして、芋屋の瓦を挑ね飛ばした烈風が、電信柱と鉢合せして面喰ひながらヒューツと呻つて盲目的に突進して來ました。不意を打たれた私共の一行は何條たまりませう。

眞先に立つたM子さんの傘が七面鳥の羽ばたきする様にバク／＼したと思ふと、骨が折れて紙が離れて荒布を摺古木の先に結び着けた様な格好になつて仕舞ひました。

その時、私の後に居たF子さんが、「アレーツ」と、容易ならぬ叫び聲を立てられましたので何事が起つたかと振り向いて見ますと、こは如何に、今しも風がF子さんの傘を奪ひ去らうとして向うへ吹き捲くつて居る。F子さんはやつては一大事と、一生懸命に柄の處を握つて傘に引かれながらも奮闘してゐらつしやいます。

「早く手をお離しなさい。吹き飛ばされてしまひますよ。」と申しましたも、

「だつて傘を持つて行かれて了ひますもの」と狂氣の様になつていらつしやいます、此の分ではF子さんも傘と一緒に大空へ舞ひ上りさうなので、私共は心配して、

「傘よりも命が大事ですよ。命と傘とは代へられませんか。傘は何時でも買へますよ。」と金切聲を立てゝ居ますと、後から追つかけて來た風奴が、又ヒューツと傘の中へ援兵に飛び込んだかと思ふと、ガクツと妙な音を立てゝ傘は、「腕を高く上げオイツ、」と私共が體操の先生に號令をかけ

られた時の様な姿勢になつて向うへ開いて仕舞ひました。F子さんは開き過ぎた松茸見た様な傘を握つたまゝ雨の中にボンヤリして居ます。その可笑しさ。滑稽さ、今迄ハラ／＼して居た私も腹が引つくり返るほど笑はずには居られませんでした。

此の時、Y子さんが、F子さんに加勢しようと、急いで足を運ぶ機に下駄の鼻緒が、ブツツリ切れて、ヨロ／＼と引つくり返りそこなつて、ぬかるみの中へ足袋跳足に飛び込まれました。其機に腰に結び着けて居られた書物包が解けて、中からお辨當が同じくぬかるみの中へ飛び出して其中から又子芋のお煮がコロ／＼と轉り出しました。Y子さんは狼狽てゝお辨當箱を拾ひ上げてうらめしさうにぬかるみの子芋を眺めてゐらつしやる様子がボンチ以上なので、通り懸りの車夫までが同情して

「お氣の毒なことをしましたね。どうせあちらに参りますから、乗せて行つて上げませう。」と申しましたがY子さんは、

「いゝえ、何に……」と顔を赤くしながら、マゴ／＼して居られる所に、向うからブーブーと自動車やつて來ました。傍若無人に飛ばつちりを飛ばしながらやつて來た、Y子さんの傍に轉つて居るお芋を遠慮會釋もなく車輪にかけて、臭い煙をブーブーひつかけつゝ雨の中に消えてしまひました。

これを見たY子さんは、何と思はれたか、鼻緒の切れた下駄を片手にひつ掴んで、スタコラスタコラス後を見ないで行つてしまはれました。

F子さんはひつくり返つた傘がどうしても元通りならず、

「どうしたらいゝでせう。」と泣き出しさうな所へ、職人體の男が通りかゝつて、

「大變なことになつてしまひましたね、どれ私がよくして上げませう。」と笑ひながら、やつとのこと、直して呉れましたので、皆でお禮を言つて雨中の道を急ぎました。

一五、お芋ほり

十月の末の日曜に我が同窓生五十餘名は、四人の先生に連れられて郊外散歩に出かけました。中野で電車を下りた私共は堀の内のお祖師様に向ひました。千草に置ける朝露もまだ乾かぬ田舎道のすがくしさ、肌寒い位い懐に入る冷風が却つて秋のしみくとした氣分を與へて嬉しい田の早稲は黄金の波を打つて豊年の喜びを湛へ、畑の大根は眞白い首を突き出して自然の化粧美を誇つて居ります。

「あんな色の黒い百姓が作つた大根でもあんなに白いのが出来るんですね」とA子さんは里川で百姓の洗つて居る大根を見て感心していらつしやいます。

「全くね、烏が鷺を産んだやうなものですわ」B子さんも同感でいらしやいます。

途中には澤山蕨茸きの家がありました。竹垣を結び廻した外をいさゝ小川がさら／＼と流れた

小さつぱりした百姓家もありました。その家の庭に柿が赤く色づいて居るのを、X子さんが見て、

「何だか田舎の伯母さんの家に似て居ますわ」と云はれますと、D子さんがよせばよいのに、

「柿をほしさうな所がでせう。」と少々皮肉つたので、X子さんを怒らしてしまひました。

「柿ぢやありませんよ、家の様子がよ、D子さんの様な喰ひしん棒とは違ひますよ」

「お氣の毒さま、伯母さんなんかどうでもいゝんですよ、柿さへ澤山ありさへすれば。」は一寸外の人では眞似の出来ぬ所。

お祖師様に近くなりますと、道の左右に乞食が居て、頭を地べたに摺りつけ摺り着け、

「お嬢様や、且那樣や……」と節をつけてベコ／＼して居ります。其顔を見ますと、腐りかけの唐茄子の如く、手足は時候はづれの胡瓜の如くねぢ曲つて二目と見られぬ曲者、神や佛の周圍にはいつも此のいやな親類ならぬ醜類が居るのでいやになります。

「ほんたうに汚いね、憎らしいわ。」とN子さんが云へば、F子さんは流石クリスチャン丈に、

「あれだつて私共の同胞よ。」

「あんな同胞があるんですか。」とN子さんは喰つてかゝる。

「それでも日本人ですもの。」

「日本人だつて同胞ぢやありませんわ。」

「それぢや何でせう。」

「乞食ぢやありませんか。」

「乞食だつて同じ國民だもの同胞ぢやありませんか。」

F子さんはよつほど乞食と同胞になるのがお好きねえ。」

「好かなくなつて、同胞だから仕様がなぢやありませんか。」

「何であんなものが同胞でせう。あれは日本人の面汚しですわ。」とF子さんとN子さんの乞食論の火の手が益々上らうとする時、B子さんが

「さう云へば随分あの乞食の面は念入りに出来て居たのね。」と水をさゝれましたので、皆がアハ

ハアと吹き消してしまひました。

「お祖師様は聞いたよりも、思つたよりも物古りたる大きな寺で賑かです、彼の踊り出す様なドンドンドンも此處へ来ると、さすがに落ち着いて聞えます。暫く遊んで居ます中に朝早く詰め込んだお腹が空腹と訴へますので、少し早い荷を軽くしようと、お辨當を取り出しましたのが、ドンに一時間前、

「さあ、これでお腹の虫も先づ安心、と元氣ボツ／＼此處を立つ。道が將に田圃に出ようとする時、畑で百姓が薩摩芋を掘つて居りました。一畝毎に大きいお芋がコロ／＼と轉り出すので、皆さんは驚きの目を見張つて立ち止まりました。

「お芋畑にお芋があるのが何で驚くに足らう」

と笑ふ人もあるか知らぬが、いくら都の真中に育つた者だつてお芋畑にお芋があるのにおつたまげはいたしません。「お芋畑のお芋の生活状態」と申しますと、少々言葉が仰山ですが、日本の字引にはどうも適當な言葉がありませんから、お芋に敬意を表して生活状態なる語を呈して置きま

す。

一體、お芋は大根や牛蒡などと違つて、親子兄弟が仲よく手を引き合つてコロ／＼して居ります。此の生活状態が大に珍しく感じたのであります。すると、「お芋を掘りませうかね」との先生の言葉に誰が不賛成を申しませう。皆が躍り上つて喜びますと、先生は、畑の百姓に聲をかけてお芋を畑ごと賣れとの談判を始めになりました。百姓はそんな経験がないからなど二三押問答をして居ましたが、結局賣らう買はうの約束が済んで、

「さあ掘つてもよろしいですが、これから五畦です。それから先はいけませんよ。袂や裾によく注意して、いゝですか。」と先生の御言葉の終はるか了らないに、待ち構へて居た數十名は閑聲を作つて芋畑總攻撃を開始しました。

畑は極柔かな土ですから、手で容易に掘れます。隣の犬がモグラ鼠もちを掘るやうに一生懸命に手先をまめに動かして居る人があるかと思へば、蝙蝠傘の先でバツバツと土を撥ねあげて居る人もあり、お芋の首を逆手にヒツ掴んでエイヤ／＼と引つ張つて居る人、急に芋が抜けて尻餅を

搦く人があります。一つの蔓に雞の卵に薄絹をきせたやうなのが四つも五つも鈴なりになつて居るのを見て夢中になつて躍り上つてをる人もあります。オツタマゲたのは側で見て居た太郎作ばかりぢやない。先祖以來嘗てこんな目に逢つたことのないお芋の狼狽は察するに餘りありません。かうなると、最初五畦の約束がどうして五畦で済みませう。無我夢中の連中は七畦を滅茶々に蹂躪しても尙ほ足りない有様。けれどもさうは約束が許さないので、引揚げの笛が鳴る。それでも未練な人々は烏鷺々々して頻りにお芋の小片まで探して居られます。

「私の蝙蝠傘が見えなくなりました」とS子さんが泣き聲を立て、畑の中をうろついて居られるので、皆が行つてヤツと探したのを見ますと、土の中に踏みつけられてへの字なりに曲つて、土塗みれのヘト／＼であります。お氣の毒よりも可笑さが先に立つて、思はず皆が吹き出しますとS子さんはへの字傘を抱いて泣き出される。

掘つたお芋は、土のまゝお辨當風呂敷に包み込む人もありましたが、大抵の方は傍を流れて居たいさゝ川で洗ひました。川縁に並んで洗つて居りますと、ドボンと云ふ水音がいたしました。蛙

の飛び込んだ音にしては大き過ぎると思つてヒョツと見ますと、さあ大變も大變、すばらしい大變です。かぬて、そ、つかし屋で名の通つたN子さんが、お芋と一緒に川の中へ飛び込んで水烟を立て、入らつしやいます。目を眩むほど周章てたN子さんは、お芋は投げ出して着物の裾をまくり上げるやら、袴を引き上げるやらして居られますけれども、皆後蒔きで岸に這ひ上られたのを見ますと、時ならぬ時雨が腰からもポチャポチャ裾からもポチャ、お仕舞ひには目からも大粒の雫がポチャ、皆さんはポチャ、のN子さんを取り巻いて騒ぎ出しました。

「どうして這入る前に裾をからげなかつたの。」と平素悟りの悪いP子さんまでが同情して入らつしやる、

「裾をからげる位なら初めから飛び込みはしないわ。」とN子さんは服れる。

「だつて覺悟の前ぢやないの、私はわざと這入つて見たのかと思つてよ。」

「誰かわざと今頃冷めたい水に飛び込むのですか。」

「さう、それぢや吃驚したでせう。」とP子さんは今頃になつて吃驚して居られます。するとP子

さんが、

「それぢや吃驚したでせうももあるのですか傍に居た私さへ自分が飛び込んだやうに吃驚しましたよ。」

「だつて河の中の目高は、もつと吃驚したでせう。」とP子さんの同情は横道へ走つてしまふ。

さて、皆さんは重いお土産を提げながらニコ／＼して歸途に就きました。歸りは田舎道をテク／＼歩いて日暮に家に着きました。

平凡に終るべき此の日の散歩もお芋掘りの一幕があつたばかりで非凡な奇抜なものとなりました。どうでせう、皆さん方も有志を募つてお芋掘りに出かけられては、それは／＼夕御飯の美味いこと、S子さんなどは、歸つてから御飯六杯に、掘つたお芋は大抵一人で平らげられたら、側で見て居たお三が目を廻したさうです。

一六、兄さんの百面相

寒い日は日向ぼつこに限ると、縁側に出て見ました。すると、何時の間にやら兄さんが先に來て、お天道様に脊を向けながら頻に剃刀を磨いで居られます。その側に白も圓くなつて寝て居ましたが、兄さんがカチンと砥石の上に剃刀を取り落した音にビクツとした彼は、體を満月のやうに圓くしたまゝ、手と足をキユーツと伸して一つ所に集めて指先をバツと開いて力を入ると同時に大きく口をあけて欠伸をしました。

私は今親しく猫の欠伸なるものを目撃して、新なる一大發見をしました。それは猫の欠伸の形式が人間のそれと甚しく相違があることであります。一體、人間が欠伸をする時には、兵式體操同様に拳を頭の上へ高く突き上げるとともに、足を反對の方面に踏ん張つて思ふ存分體をそらすのが欠伸の第一舉動で、その舉動のまだ終らぬうちに口を顔一杯にして、アーンと掛け聲をす

る、これが第二舉動で、口をたたんで欠伸が「終りツ」となるのです。若し、之を今白がしたやうな工合に脊を圓くして手と足を一束にして伸したとしたらどうでせう。随分妙手古なものになつてしまつて欠伸どころの騒ぎぢやありません。所が、そこへ行くと本物の猫だと少しも可笑しくないばかりでなく、何だか一種の愛嬌を生じます。

先日學校で、理科の時間に動物の先生が、

「猫と人間と違つて居る點を云つて御覽なさいとおつしやつた時に、

「猫には眉毛がありません」と答へたら皆さんから笑はれて少からず器量を下げましたが、あの時若し此の欠伸の一件を答へたら先生もキツと感心されたでせうに、僅か一週間違ひで口惜しいことをしたなど考へて、つい話が横道へそれました。

さて、兄さんは研ぎ上げる剃刀を反古紙で一寸拭いて、左の親指の腹で、刃の上を二三度無雜作に撫で、見とれる。如何にも危なさうで、若しあれがゾクツと切れたら大變と、私は冷や／＼して居ると、鈍刀だと見えて少しも切れる様子はない。道理で、兄さんも何時になく落ち着き拂つ

てあんな真似をされるんだなと可笑しくなりました。けれども、可笑しさを堪へて見て居ると、兄さんはいゝ氣になつて、いろんな藝道げいどうをされる。

痞せ畑に出来たお芋のやうに筋張つた左の腕を捲つて前へ突き出して置いて、其處へ剃刀の刃を持つて行つて、裏表を頻にバツバツと打ち着けられる。併し、私はもう冷や／＼しませんですが、腕に剃刀を打ち着けるのは何のお呪まじないか分らないので、私は兄さんに尋ねて見る氣になりました。

「兄さん」

「ウ、」と兄さんの返事は鼻へ抜けてしまつて餘り生ぬるいから、

「ボカーン」と一つ面喰めんぐはせを申しますと。

「何だ煩さい奴だ」と剃刀でも振り廻しかねまじき見幕でありますから、

「兄さん、今のボカーンは景品ですよ。本當は一寸お尋ねしたいことがありますのよ」と慎重な態度たいどで申します。

「僕にかい」

「エ、」

「ボカーン」と敵かたきを打たれる。

「アラ眞面目に云つて居るんですよ。」

「之は景品だよ。」随分人を馬鹿にして居るぢやありませんか、けれども、喧嘩けんかにもなりませんから、我慢して、

「兄さんはどうして剃刀を腕に打ち着けて居ますか」と尋ねました。

「ム、之か。之は刃を合はせる爲めさ。理髪屋とこやでは革かわでこするけれども、腕の皮だと金がかゝらないで済むからね。」成程聞いて見れば如何にも尤です。さう云ふことに利用するには、兄さんの腕の様に骨と皮で出来て居るのは最も都合がよい。けれども、ウツカリしたことも云へませんから、

「成程、役に立たぬ人間でも、皮だけは使ひ様で役に立ちますわね。」と要領を得ぬことを云つて

お茶を濁しますと。

「だがね、お前の様に面の皮の厚いのは使ひ道がなくて始末が悪いさ、」と直に憎まれ口を利きながら、腕の毛を剃つて居られますから、

「兄さん、腕を剃つたつてお顔の髯は落ちませんよ、」と申しますと、

「餘計なことを云ふものでない。これが眞の腕試しだ。所で先づよしとして、お前其處に見物して居る序に、僕に一つ頼まれて呉れないか。奥へ行つてね。鏡臺と、金盥と、手拭と、石鹸とそれから座蒲團もあれば尙結構だ。」随分虫のいい話です。

「兄さん、そんなに澤山は一緒に持つて来られませんか。」

「一緒になくて結構。二度にでも、三度にでも、四度にでも僕はちつとも差支がないからね。」

かうなると、私にはちつとも結構でありませぬ。「僕はちつとも差支なくつても」折角日向ぼつこに来ることが無意味になつてしまひます。併し、頼まれて見ますと、兄妹の義理もあることですから、素直に座蒲團まで揃へてやりましたので、すつかり兄さんの髯剃準備が整ひました。

是に於てか、兄さんは襟の周圍に西洋手拭を掻き付け、鏡臺の前に安坐をかいで坐りながら、一渡り頬のあたりを手で撫で廻した後、傍の金盥に向いて頬に左右の頬を濡りをいれ、矢鱈に石鹸を塗りつけられますので、顔中が石鹸のアブクだらけになりました。けれども、兄さんは平氣で右の手に剃刀を取つて、左の頬の上部から、チヨキ／＼剃り初められました。所が、先刻鈍刀だと思つた剃刀は不思議にもよく切れます。刀先が動くに従つて掃くやうに毛が飛びますので、呆氣に取られて見て居ますと、剃刀はだん／＼髯を掃き落して下へくだつて行きます。下へ剃刀が動いて来るに従つて、兄さんの人相がいろ／＼に變ります。私は白状しますが、嘗て寄席で百面相と云ふものを見た外、是迄彼の位人間の面相の面白く變化するのを見たことはありません。剃刀が頬骨の下から顎骨の上へ差しかゝると、口が急に縦に開いて、顎が恐しく長く伸びて、今迄弛るんで居た顎の皮が檢張にでもかけたやうにつツ張ります。それと同時に眉が額の上の方に退却して、眼が置いてきぼりになれば格好に下へ向いて居りますから、顔全體の籬が脱れてヒョットコの面を念入りに踏み潰した様で、まるで人間性を失つてしまひます。

私はあんなに崩れた造作が、元通りの顔になるものかしらと、内々心配して居ますと、剃刀が顎の先へ行くや否や局面きよくめんまつた全く一轉、瞬またく間もあらせず、開いた口が塞ふさつて眉が急に下へおりました。そして、上顎の齒をむきだして、下唇を深く咬へ込んで、顎を前方へ突きだしますと、前とは全く反對に頬の皮が縮こまつて、元來小さからざる鼻が左右へ著しく發展して無作法に安坐をかいてしまいました。其途端またに今迄糸瓜へちま式しきに伸びて居た顔がガラリ變つて掴み潰つぶした唐茄子からしな式しきになつてしまひました。其面相の千變萬化たるや、錢を使つて寄席に行つて見る面相より數等の味あつて面白く、其處らの雑誌にあるボンチ繪より數倍の滑稽美があつてチャンチャラ可笑しいこと限りなく、一目で吹き出し、二目で轉つて腹を押へずには居られないほどであります。それでも兄さんは、泰然たいぜん自若じじやくとして其顔を鏡に寫しながら相變らず口を曲げたり、歪ゆがめたり、鏡に映つる百面相を片つ端から剃片付けて居られます。

一七、いたづらミイ子

ミイ子、ミイ子と云つても私の妹でもなければ、姪でもありません。と云つて娘でないことは無論です。飛んで居る蠅はに飛び着いて、机の上の花瓶はなびんをヒツクリ返して、晝寝ひるねして居た兄さんの顔に時ならぬ夕立を降らした子猫の美しい子です。

一體此のミイ子は白の子でありますけれども、父親がありません。人間には必ず父と母とがありますが、不思議にも此のミイ子には父親はあるともないとも分りません、未だ嘗て父と名乗つた者を聞いたことも、見たこともありません。

それから今一つ不思議なことは、此のミイ子は無籍者むせきしやであることです。私の妹の春ちゃんが生れた時には、お父様が早速お役所に出生届を出されました。けれども、此のミイ子が生れても誰も出生届しうしんけいは出しません。お隣のジョンすら犬の分際ぶんざいで居てチャンと警察にお届がしてあるのに

同じ獸類でありながら、ミイ子ばかりは生れつ放しであります。それでもミイ子と名前のあるのが奇蹟です。

さて、ミイ子は今年の春床下の暗い／＼炭俵の間に産聲を上げたのでありますが、何日に生れたか、それすら確なことは分りません。十日餘り経つて目が開いて、歩けるやうになつてから、白が勝手に連れ出したのです。連れ出して来た時には、家に置くとか置かぬとか、随分議論が沸騰しましたが、器量のよいのは徳なもので、ミイ子の顔が圓くて、眼が圓くておまけに鼻の頭が圓くて、可愛いと云ふので、お祖母様が折角生れたものを捨てるのは可愛相だと、頻に同情を寄せられたお蔭で、命を拾つて、今日に及んだのであります。ですが、母親の手一つに育つた所爲か、どうも教育がうまく行かないで、我儘者の腕白で、家内中の持て餘し者であります。

子供と云ふものは、妙なものの、人間の子でも獸の子でも同じだと見えて、ミイ子は襖や障子を撈るのが大好きです。撈る度に皆から頭を打たれます。人間の子供は頭を打つと馬鹿になると申しますが、猫の頭は木魚式に出来て居ると見えて、物指位でポコ／＼やられても平氣の平左で、

ものゝ十分と経たぬ内に、障子の破れ目が風の出入する度に白い舌を出したり、ひつ込めたりして居るのを見ると、御自分にお相手するかと勘違して早速飛び付きます。そして障子のさんを梯子昇して何處までも昇ります。その度に川字形に爪跡を残します。

先日などは大事な掛物に爪を立てたとかで、お父様からさん／＼折檻をされて、可愛さうにお床の上でオシッコを漏らしました。此の位の折檻は悪戯者に取つては當り前かも知れませんが、其爲めに一番迷惑を蒙つたのは私で、其後始末を命ぜられた時は、ミイ子よりも先に私が泣き出した位でした。

一體、ミイ子は尻辯が悪いので厄介です。然し、ミイ子の爲めに辯護をしますと、赤ん坊の春ちやんだつて蒲團の上にお小便をしたり、御母様の膝の上でさへウンコを取りはづしたりするとは珍しくないので、彼ばかり責むる譯には行かないのですけども、人と云ふものは甚だ勝手なもので、人間と獸類の間に手癖しい區別を立てゝ居りますから、春ちやんのしたことは當り前となり、ミイ子がしたことは不都合千萬とあつて、時折ひどい目に逢ふことがあります。つ

い此の頃も姉さんが仕立かけの着物を其儘にして臺所に立つた後で、ミイ子は好い氣になつて、坐り込んだままは無事でしたが、暫くして姉さんが坐に戻つて來た時は、ミイ子は頻に鼻を鳴らしながら、両手で着物を掻き寄せて居りました。

「コラ／＼そんな悪戯をするんぢやないよ」と姉さんが聲をかけた時は、ミイ子は變な顔をしなから飛び退きました。

「オヤ、此の奴はマアほんとうに憎らしい……」と悔しさうなキンキリ聲を立て、物指しを頭の上に振り上げた時は、後の祭で、命から二番目の晴着の上は時ならぬ大洪水、何とも云へぬ臭氣が紛々として居りました。これから、ミイ子はいよ／＼一家の問題となつて、追放の宣告まで受けたところを、「可愛さうだ此處までは」と、慈悲深いお祖母様が命乞ひで、其まゝ泣き寝入、損したものは姉さんばかりで、誠にいゝ氣味で……はありません。

其後又臺所の隅で、お竹がお薩の残り物と感違ひをして拾ひ上げたのが、ミイ子の落し物だと知れた時、茲にまたもや一問題が沸騰しかけましたが、相手がお三どん丈けに寧ろ滑稽扱ひにさ

れて、

「お竹が周章で、自分の口へ放り込まなかつたのが仕合だつた」と笑ひ話の中に葬り去られてしまつたのは、お竹には氣の毒、ミイ子には幸福でありました。

所が、二三日前端的にもミイ子に取つて一大事件が起りました。此の事件は私の家に取つては排日問題よりも、濟南事件よりも重大な容易ならぬものでありました。私が學校から歸つて見ますと、兄さんが烈火の様になつて、顔中に火吹竹の様な癩癢筋をオツ立て、ステツキを大上段に振りかぶりながら、ミイ子を追つかけて居られました。ミイ子は夢中になつて逃げ廻つて居ります。机の上から本箱の上、インキ壺をヒツクリ返すやら、筆立を蹴飛ばすやら、果ては床の間の生花まで滅茶苦茶にする。チリンカラン逃げる音、ドタバタ／＼追つかける響、家の中はまるで馬賊が踏み込んだ様な亂暴狼籍。

「もうお止しなさいよ」と姉さんは兄さんを引き止める。

「子猫のしたことだもの、許しておやりよ」とお祖母様は入齒を吹き飛ばしさうな口附。私は唯

呆氣に取られて、お辨當箱をブラ下たまゝ、此の決末はどうなるかと、お祖母様の尻つほに續くアワヤと思ふうちに彼の女は障子に飛び付きました。兄さんは電の様にステツキを打ち下されました。哀れやミイ子の脳天が粉微塵かと思ふの外、この時早く彼の時遅し、障子を破つてスボリと體が椽側に抜ける、ステツキがピツシヤリ、ミイ子の脳天と思つたのは障子の肋骨で、三本微塵となつて下りました。

「此の野郎ツ」と叫んで、兄さんが障子を引き開けた時には、彼の女は長い尻尾を引きずつて椽の下に飛び込んでニヤーン。兄さんは残念さうに、「畜生めが……」と親の仇を取り逃したやうに齒がみをしながら、振り上げたステツキの遣り場に困つて角立つた目をクシヤ／＼、ウカと近寄つて傍杖を喰つては大變と、私共は引つ込んでしまひました。

さて、此の騒動の發端と云ふのは、兄さんの座蒲團の上に例の尻辯の悪いことをしたのであります。

其後二日間は此の騒動に膽を潰して、ミイ子は床の下から姿を見せませんでした。所が、一二三

日目のお晝に彼はコツソリ臺所の口から家の中を覗いて、人影の見えぬを幸ひ上にあがりました。そこには今お竹が焼かうとして置いた鮭が五切六切ありました。床下で腰が抜けるほど腹を減らしたミイ子は、これ有難しと舌鼓を打て失敬し初めました。失敬しては喰ひ、喰つては失敬してムニヤ／＼ニヤ／＼唸りながら二切半ほど頂戴した所に、お竹は便所から出て來ました。お竹は驚いて、「此の泥棒野郎」と叫びましたが、時既に遅し、美しい子は三切目の半分をくはへて又候床の下へ駈け込みました。

かうなると、ミイ子の人望はいよ／＼地に落ちてしまつた。家庭の平和を紊亂するものとしていよ／＼追放の嚴罰に處せらるゝこととなりましたが、併し、ソレツキリ彼は再び床下から出てまゐりません。今後の彼の運命がどうなりますやら……」。

一八、おしつこの水道

健ちゃんは今三つの腕白坊であります。

六つになる春子ちゃんと、日當のよい椽側で、玩具の粗板や庖丁や七輪やお鍋や、お皿を並べ立て、お客様ごつこをして遊んで居ります。健ちゃんはお客様、春ちゃんは御主人役であります。チヨコナンと愛らしく膝を押し立て、座つた健ちゃんは、

「こんちー(今日)、」と頭を下げますと、

春「いらつしやい。御機嫌よう。」

健「もうだいぶんい。」健ちゃんは、「御機嫌よう」を病氣のお見舞と感違へしたらしい。

併し春ちゃんは、氣を利かして、

「どなたか御病氣？」

健「チビチよ。」

春「エー。」と春ちゃんは解せぬ顔をして、健ちゃんの顔を覗き込みました。

健「チビチよ」と健ちゃんは済したものだ。

春「エー」と又春ちゃんは目をしばたぎきながら問ひ返しました。

健「チブチユーよつてば」と健ちゃんはいま／＼しさうに語尾に力を入れました。

春「おやさう、どなたがチブスしたの」と春ちゃんは初めてチブチユーの意味が分つた。

健「僕のお目がチビチしたの、」私は吹き出さずに居られませんでした。此頃お伯母さんが腸チブスで入院され、健ちゃんは眼が悪くてお醫者に行つて居ります。だから自分の眼病をチブスと診断して居るのであります。

春「お目はチブスでないわ、トラホームでせう、」春ちゃんは年が年だけに分つたことを申しますと、

健「いや、トランボンない、チビチよ、」と大將は不平らしく首を振つた。

春「だつて可笑しいわ、そんなチブスないわ、」と春ちゃんは嘲笑ひ出した。

健「をかちーない、チビチだよ、」と健坊は甚だ不機嫌であります。けれども春ちゃんも負けては居りません。御馳走の方はそつちのので、お客様と主人公とはチブス争を始めました。

春「チブスは健ちゃんボン／＼チヤンが痛いよ。」

健「ボン／＼チヤンない。ボン／＼チヤン赤チヤンがあるの。」

春「赤チヤン幾つ」

健「三ちよ、」自分の歳と取り違へて居ります。

春「赤チヤンにも御馳走しませうね。」

健「ム、赤チヤンごつち駄目。熱ちつとも大變よ。」やつと健ちゃんの御機嫌はなほりましたが

呂列が廻りかねてまるで唐人の寢言を聞く様です。

暫く二人の間に奇抜な對話が連發されて居りましたが、健ちゃんは

「ちつべたが痒い、」と云ひ出しました。

春「お行儀が悪いのね。ぢやアかき／＼してあげませう。立つちなさい」と春ちゃんは、お皿を下に置きました、そして、着物の下から手を入れて、かき初めました。

春「こゝ？」健「こゝなら。」

春「どこ？、こゝ？」健「どこない、もつとよ。」

春「分らないわ、こゝ？」春ちゃんは頻りに手を上や下や右や左にやつてかいて居りますけれども、健ちゃんは一向満足する様子ありません。

春「どれ、もつとまくつて御覽よ。」と着物をまくり上げますと、今度は

「しつこちたい、」と健ちゃんは云ひ出しました。

春「こゝは駄目よ、御客様だからもつとあつちよと申しましたが、健ちゃんは我慢しきれなかつたと見えて、春ちゃんが飛びのく間もなく、シャツ／＼と春ちゃんの前褌から御馳走の上へ時ならぬ瀧が落ちかゝりました。春ちゃんは眞赤になつて、

「知らないわ／＼、」と澁面を作つて奥へ駆け込んで、「健ちゃんがしつこしかけたあ」と泣き出し

ました。けれども健ちやんは一向平氣なもの、しばらくぼんやりと大洪水の跡を眺めて居りましたが、どう思つたか、腰を洪水の前に下ろしました。そして恐る／＼水溜へ手を出した。一寸の間は指の先で水をあしらつて居りましたが、やがて兩方の手で掻き廻はし初めました。それから傍にあつたお皿で其の水を汲み出して七輪の上に乗せました獨りで御馳走を作るつもりと見えてしきりに玩具の團扇で七輪を煽ぎましたが一向手答へがないので止めました。それから其處いらにある道具を皆水溜の中に並べました。けれども之も健坊の好奇心を満足させなかつたと見えて脇にあつたハンケチを取つて水に浸けて橡側に雑巾がけを初めました、小便の上をにじりながらしきりに拭いて居りましたが、まだそれでは物足なかつたと見えて、此度はジク／＼の雑巾を額へあてまして、何んでもこれは容易ならぬ事と注視して居ますと、額から頬つべたへかけてやがて顔中を撫で廻して居ます。橡側を雑巾がけした序に顔にも雑巾がけをするつもりだと見えまして。

丁度此時奥からお母さんが、

「何處へおしつこをしたのです、と云つて出て來られました。春ちやんはもう着物を着かへて晴々しい顔になつて、其後から附いて、

「橡側よ、一杯ですもの、と云ひながらやつて來ました。此時は丁度健ちやんは、其濡雑巾で口のほとりを頻りにこすつて居りました。

「健ちやん何して居ます、そんな處へおしつこして駄目よ。」と云ひながら、お母さんは不圖其濡雑巾の當つた顔と洪水と見くらべて、

「まあばつちな人だよ、それはおしつこぢやないの、」

健「んにや、ビービよ」と平氣なもの、

母「ビービつてあるもんですか、穢いね、おしつこで顔を洗ふ人があるもんですか、ほんとうにまあ呆れてしまふよ、と愚痴だら／＼で駆け寄つてハンケチをひつたくりますと、

健「綺麗なつた、と健ちやんは一段と男を上げた様な氣であります。

母「何と云ふ阿房ちやんでせう。ほんたうに穢いね、こつちにいらつしやい、洗はなけりや駄目

です。」とお母さんは火のついた様に云ひながら、健ちゃんを小脇にひつ抱へて湯殿へ行かれます。健ちゃんは糸で吊れた龜の子見た様に手足を頻りにもがきながら、

「綺麗なつたよ、ばつちないよ、」と叫んで居りましたが間もなくすると、湯殿から、

「べたいよ母ちゃん、べたいよ、」と泣き聲がします。

「冷べたいのは當前ですよ、あんなおいたをする」と叱り聲も聞えます。

健ちゃんは此騒動で頗る御機嫌を損じましたが、それも一枚のお煎餅で直りました。そして私の傍にやつて來ましたから、

「健ちゃん何をしたの」と申しますと、

「おちつこのちゆうだう。(水道)よ」

「おしつこの水道は駄目よ、ばつちだから。」

「ム、おちつこのちゆうだうは痒い、ね。」

「痒い、からばつちよ。」

ム、おちつこのちゆうだうはあつた(暖)いね、
私はとうとう吹き出して仕舞ひました。

一九、蠅のゆくへ

今日もお隣の御隠居が來られて、例の如くお父さんと碁を始められました。二人は碁敵ださうですが、敵と云つても伊賀越の仇などとは大違ひで、仲がよくつて向が來なければ此方が行く、此方が行かなければ向が來られて、

「今日は一二盤てよませう。長くなるといけないから。」と云ふのが始まりで、石を手にしたが最後、「モウ一盤、」「モウ一盤」と、其モウ一盤が通り越して夜明けまでも續きます。飯時になつても、例のモウ一盤で、御飯もお汁も冷めてしまひます。三度の御飯よりも好きとは全くかう云ふのを申すのでせう。私共も學問を彼の位勉強しましたら、高等女學校を卒業しないうちに博士

位には苦もなくなれると思ひますが、碁と云ふものは上手にならない様に出来上つて居るものと見えまして、夜通しでやりましても十年一日の如くで、何とか碁ださうです。そらへ碁のこと何か申しましたね、お蕎麥と同じ名前ですよ。さうくさる碁、さる碁、全く出来さる碁つまりさる碁ださうです。

其のさる碁が今日も晝御飯が済むと間もなく始まりました。二人は相變らず夢中になつて、バチリ／＼一體碁と云ふものは一石、一石が生きなけりやならぬものださうですが、このさる碁では十石も二十石も枕を並べて死んで居ます。これかぼんたうの將棋倒れと云ふのでせうか。其處へ何處からともなく、「ブーン」と飛行機が都の空を御見舞した様な音がして、眞晝のたるんだ室内の空氣に緊張した小波動を起したかと思ふと、一疋の蠅が私の鼻先を掠めて、

「お出でなすつたな、うまい處へお出でなすつた、なと同じことの一つことを繰り返しながら、バチリ／＼石を並べて居る御隠居の頭に止りました。」

抑々御隠居の頭なるものには、足止りとなるべき毛が一本もない不毛の地で、年中磨がかゝつ

て御光がさして居る位ですから、蠅が六本の足で捉つても、動ともすれば迂り勝ちであります。そこで、蠅も頗る慎重の態度で、スケートをやるやうな調子で、三步、四歩前へ迂りましたが、御隠居は依然として、

「お出でなすつたな」を繰り返しながら一向平氣であります。そこで、横着な蠅はいゝ氣になりました。彼は兩方の前足をニュツと前へ伸ばしながら摺り合せて居りましたが、やがて、ラツパのやうな舌で其足を嘗め初めました。何か御馳走の御餘りでも手の掌に着いて居るのかと見て居ますと、二つの大きな目玉が輝いて居る自分の頭を頻に撫で廻します。つまり、御隠居の頭を踏み臺にしてお化粧を始めたのです。足掛りのない、迂り易い、勾配の急な所へ居るのでから、蠅も氣が氣でないと見えまして、時々足場をかへて動きますので、よほど腦を刺撃したものと見え今迄夢中の御隠居も電の如くに頭を左右に振られました。不意打を喰つた蠅は足を迂らして二三度尻餅をつきました。然し、下が下ですから怪我をした様子もありません。蠅は「ブーン／＼と不平を鳴らしながら上へ飛び上りました。そして、何とか式飛行機が晴れたる空に大圓を描くや

うに御隠居の頭の上を二三回飛び廻りましたが、別に適當なる降着點を見出さなかつたと見えて懲り耻ぢもなく又々赤禿の天邊へ飛び着きました。そして、此度は兩方の後足をあげて翅の上を撫で始めました。御隠居はまた頭を左右に動かされました。が、今度は蠅も十分警戒したと見え體をヒツタリさげて確乎と六本の足でしがみつきました。

御隠居は「煩いな、煩いな」と三四度繰り返しながら、二つ三つ石を置いてから、片手を揚げて上を拂はれました。けれども、蠅は「その位のことには豫期して居りますよ」と云はぬばかりに「ブーン」と囁の聲を放つて飛び上りつゝも、御隠居の手が下に下ると同時にまた元の場所へ飛び下りきました。そして、憎らしいほど泰然と構へたんで、どう云ふ積りか、御隠居の頭を方々嘗め廻しました。此惡戯には流石の御隠居も大に癢に障つたと見えまして、靜かに手を頭の上へあげられました。けれども蠅は別段氣に止めない様子。すると其手が蠅の眞上に來たかと思ふ一刹那、ハツと云ふ間もあらせず、瞬間の一撃が蠅の上に加へられました。今度は如何なる蠅も粉微塵かと思ひの外、何と云ふ運のいゝ奴でせう、彼はヒラリと身をかわしました。それと同時に蠅

をはづれた御隠居の掌は遠慮會釋もなく、御自身の頭へ火の出るほどピシヤリと當りました。私は御隠居が目を廻しはなさらないかと心配しましたけれども、流石は若い時代に擊劍で固めた頭だけに蠅がとまつたほどにも感じなかつたらしい、平氣の平左で相變らずバチリ／＼。それに引換へて、彼の蠅は此の一撃に恐れたのか、或は又御隠居の頭に愛相をつかしたのか、あちらへと飛び去りました。

私はそれから蠅に少からぬ興味が湧いて、彼の今後の活動振が見たくなりました。そこで、彼の後について次の室へ這入りました。此處は兄さんの室であります。兄さんは寢て居て本を讀むのが大好きです。尤もこれは眠たくなつた折、其本で顔の上に屋根をふいて眠るに便利だからであります。今日ももうチャンと其屋根が出來て居ります。蠅は此の様を見るところ、考へたか、其屋根の上に足をおろしました。すりながら、屋根の上は御隠居の頭の上のやうに興味がなかつたと見えて、直に左の手に飛で移りました。その時、兄さんは「ウーン」と雑音が喉につかへたやうな聲を出すと共に、左の方へ寢返を打たれました、其機みに顔の屋根がズラリと疊の上に落

ちました。すると、蠅は驚いて右の肩へ飛びのきました。そして、何處へ行かうかと手足を矢鱈に揉みながら兄さんの顔のあたりを観測し始めました。

「サア面白くなつて来た。」と思ふ間もなく、蠅は例の如くブーンと吁鳴りながら額の上へ飛んで来て翅を収めました。それから、二三度手足を動かして體操のやうなことをいたしました。けれども、何の反響もなかつたので、蠅はいま／＼しさうに歩き出して額を下つて目尻の處へ来て頻に其處いらをほじり初めました。ところが面白いぢやありませんか、彼が手足を動かしますと、兄さんの顔も電氣をかけられたやうにビク／＼と妙に動きます。やがて兄さんはムニヤ／＼と口を動かしたかと思ふと、二つ三つピチャ／＼と棚から牡丹餅がぶつこちて来たやうに舌を鳴して置いて、芋虫がのたくる様に右の方に寝返をしました。蠅は一方ならず面喰つた體でありましたが、また頬べたへ来て、此度は唇や鼻の穴を掘りました。

所へ折もあらうに、悪戯者の美しい子がヒツクリやつて来ました。そして、兄さんの顔を侮辱して居る蠅を見るや、仇でも取る積りか、蠅を見かけてヒツト兩方の手を出しました。

蠅は「何を生意氣な」と云はぬばかりに嘲り聲を一入高くして、美しい子の顔の上を二三度飛び廻りました。之を見た美しいはモウ夢中になつてしまひました。何の遠慮もなく、兄さんの顔に足をつけるかと思ふと、頭を踏み臺にして後足をウンと跳ねると、彼の體は球を投つたやうに宙へ飛び上りました。けれども、彼の手は狙がはずれて蠅には届きませんでした。その代りに前にあつた机の一輪挿にパツと觸りました。花瓶は一たまりもなく逆様にヒツクリ返りました。そして潑れた水が兄さんの顔へタラ／＼と注ぎかゝりました。

「此野郎めツ」と跳ね起きた兄さんの鼻からも、顎からも耳からも夕立後の大佛様見たやうにボタリ／＼大粒の雫が落ちて居ます。美しい子は之を見ると、お化とでも思つたか、脊を圓くして毛を立てながら逃げてしまひました。

さて、蠅の行くへはどうなつたでせう。もうそこいらには影も形も見えません。

二〇、アッコロ大將

今年三つになつたばかりの親類の武ちやん家中の花形で、茶目式活動家であります。武ちやんの一家はこの活動家のために朝から晩まで目を廻はす繁昌です。障子に大きい穴を拵へたかと、思ふとお火鉢の灰をひつくり返へす。臺所に現はれてお味噌を嘗めて妙な顔をして居るかと思ふと、二分と経たぬうちに二階の梯子段からおつこちて福助流のオデコに饅頭大の瘤を作つて泣いて居ります。而も、武ちやんが最も活動する活動期は御飯時であります。武ちやんは自分のことをいつも「たちやん」と申します。巧に省略法とかを使つて言葉の經濟をやつてをるのです。

さて、食事時となつて、食卓に就きます位置は、「たちやん」はいつもお父さんとお母さんの間です。これそも／＼危険警戒の配備ですが、大概はこの配備が無効ですから驚かすには居られません。食事が始まりますと、「たちやん」には匙が與へられますけれども、この匙には餘り満足

ではありません。矢張大人のするやうに箸でたべることを光榮としてをります。ですから「たちやん」は時々自分の前にある匙には目も呉れず、お香物箸をヒツ掴んでチョココン頭を動します。これが戴きますこと云ふ合圖です。ちやんと禮法を心得て居る所はなか／＼感心です。

所が元來匙ですら満足に御飯が口に到着しないのですから、箸にも棒にもかゝらう筈がありません。箸が口に達しないうちに飯粒は箸からお暇を頂戴して、九郎半官義經が一の谷の逆落しと云つた風に「たちやん」の胸の谷をコロ／＼轉がつて行きます。機敏な奴はエプロンのホケツトに武者ぶりつくもあり、小さなお膝の上に踏み止まるもありますが、大部分の抜け作どのは更に疊の上まで落ろて行くのもありましておべ／＼と備後表の疊が飯だらけになります。それでも二粒三粒箸の先にくつ著いて居る奴を口に入れて、ヒチャ／＼やりながら、こんどは左へお汁椀を抱へます。これが又とつても大變です。口まで行かないうちにお椀か六七十度も傾斜して三分の二は、食卓と着物の上に流れ落ちる。御汁の實と御飯粒とが膝の上に落ち合つて、「ヤー」とも「ハ」

幸にして口元まで行つた御飯とお汁も大抵は頬つべたや、顎の先に塗り着けられますから顔の輪廓が變つて道化役者のやうになつてしまひます。

「これぢや塗つて居るのかたべて居るのか見當がつかない。」とお母さんまでがこぼして居られます。

かう云ふたべ方ですから、二三度お茶碗を上下するうちに御飯もお汁もなくなつてしまひます、すると、おん大將はすぐに「ゴアン、」「オチー。」とお碗を突き出します。若しこの時間違つてお小言でも申上げようものなら、それこそ大變、茶碗だつて、箸だつて、匙だつて、そこらにある物は井でも何でも皆投出して

「イヤン／＼」と泣きながらしまひには足までも放り出して、御飯だらけの壘の上に芋虫が癢を起して引きつけたやうにヂタバタ轉り始めます。さあ、かうなると堪りません。腹にも背中にも御飯粒がいよ／＼ぬり着いて、まるで御飯粒の餡コロになります。

さて、このアンコロ大將が起き上つたが最後、猪のやうあばれ出しますから、到る所機械水雷

を敵前に撒いたやうに御飯粒がぶちまけますから、お母さんと女中さんとは帯を持つて後から追つかけ廻ります。やがて瀧痕が治まつて、えらい大人なくなつたなあと、縁を覗いて見ると、これはしたり、大將一向平で氣足の裏にふみ着けた奴を頻りにむしつて喰べてゐます。之を眞先に發見して驚いたのはお母さんです。

「まあ、『たちやん』のばつちなこと、抱へ上げて足に雑巾掛けをしてやられます。手数のかゝること夥しい。併し、初めから匙などにせず、五本箸を利用さればこんな騒ぎにはならぬのにおかしくなります。

更におかしかつたのは、或時、私が彼岸の牡丹餅をお土産に持つて参りました。「たちやん」は大喜びです。お母さんがお重の蓋をあけるかあけないうちに手を突込んで、一つ掴み出して、いきなり口へ持つて行きました。牡丹餅が大きくて大將の口が小さかつたので、牡丹餅は口の入口を閉塞して、兩方の頬つべたと、鼻の頭へアンコロがベツタリくつ着いて、まるで、芝居の悪形のやうな顔になつてしまひました。

お母さんがあわてて、むしり取らうとしますと、急いで口の中へ押込んで、よく噛みもしないで呑込んだので、此度は喉へつかへて目を白黒し始めました。抱き上げますと、苦しがつてお母さんの首つ玉へしがみつきましたので、此度は伯母さんの首が筋だらけになつてしまいました。側に居た私は氣の毒やらおかしいやら形容の出来ぬはめに陥つてしまいました。牡丹餅の罪作りとはかう云ふのを意味するのでせう。

二一、熊蜂退治

伯父さん所の畑の畔に大きな椿の木がありました。その木に大な熊蜂が巢を掛けて居りました。最初私共の目に附いた時は普通の梨位の大さでしたが、日々に大くなつて夏蜜柑大となり、デコ坊の頭大となり、一月餘り経つ内に二升入の徳利大となりました。

或日伯父さんが大根の地拵へをすると云ふので、畑を耕して居ました。所が、性來の迂活物と

て、椿の木に蜂の巢のなつて居やうとは氣附かう筈がなく、木の枝が邪魔だと云ふので、それを切りました。すると熊蜂の巢はひどく動揺しました。蜂は不意を喰つて膽を潰したと見え、ブン／＼と閨を作つて巢の中から飛び出しました。飛び出すといきなり伯父さんの禿頭の天邊に尻剣を突差しました。

「あ痛ツ／＼。」と今度は伯父さんが不意を打たれてびつくりシャツクリ、二三度も尻餅をつきながら周章でた極鉞を放り出したまゝで家の中に駆け込みました。

さて窺かに熊蜂を窺つて見ますと、甚だ不穩の状態で澤山の蜂がブン／＼呻りながら巢の底に在る穴を出入して居ります。この勢では迎ても晝は近づく譯に行かぬから、と蜂退治の相談が始まりました。いろ／＼評議の末、夜蜂共が眠つて居る不意を襲つて、巢を風呂敷に包み取つて水中に一晚投じて置けば蜂を全滅する事が出来ると云ふので、作戦計畫は風呂敷敷攻めと定まりま呂した。私共は口の様によく包めるかどうかを疑ひましたけれども、伯父さんと兄さんとは大風呂敷の兩端を縫ふやら、松明の用意をするやら大騒ぎで日の暮るゝを俟ちました。

やがて夜は來ました、伯父さんは晝の仇打と云ふので、先づ松明を振り翳して先頭に立つ、見さんは風呂敷をヒツ掴ん出後に續く、恰も富士の牧狩の曾我兄弟夜打の光景です。

松明の火が椿の下に行つた時。

「居るぞ、蜂が二三疋出て居るぞ。」と伯父さんの聲が暗の中になると、

「見張りを置いて居るのでせう。」と見さんの聲が同じ暗の中にする。

「よく巢の様子を偵察して置いて、うまく包まんと行かんぞ。」

「少し高い處にありますね。手が届きませうか、梯子をかけなくても。」

「何大丈夫だよ、竹垣に片足かけて脊伸をすれば十分だ。」

「さうですかね、巢はよく分りました。」

「そんなら松明は引くよ、蜂が飛び出すといかんから、しつかりやれ。」と云ふ伯父さんの聲諸共に灯は五六間離れた畑の中に動いて行つた。しばらく沈黙が續く、今包んで居るんだなと私共は片唾を飲んで暗の中を目が痛いほど見詰めて居ますと、こは如何に、「バリバリドシン」と暗の中

に唯事ならぬ物音がしたかと思ふと、すぐ、

「あッ仕舞つた。ア痛ッ。」と云ふのは確に兄さん。

「どうした。」と松明の火が近寄つて、「巢は包んだか」と呼ばはりましたのは正しく伯父さん、

「包みかけて落こちたんです。垣根が破れたので、ア痛ッ。」と岸の下の暗を泣き聲が掻き混ぜると、

「何處か打つたかい。」

「打つたんぢやありません。頬ツべたと腕を蜂にやられたのです。」

「早く起きて來んと行かん、又やられるよ。」

「起きられません。」

「何に起きられん、腰が抜けたか、そいつは困つたな。」

「腰が抜けたのぢやありません、溝の中に仰向けに落ちたので起き上れんです。」

「どれ起してやらう。」と伯父さんは松明の火を振りながら、岸を下つて行かうとすると、巢を半

壊にされた蜂は狂違の様になつて火を見かけてブン／＼飛び附いて出ました、すると元來口程に勇猛でない伯父さんは

「ヤツこりや堪まらんぞ」と松明を放り出して、頭を抱へて岸を這ひ上るや否や一目散に逃げ出しました。

「兄さんは矢張り溝の底で、「あ痛た／＼」と叫び續けて居ます。私共は兄さんが蜂に喰ひ殺されはしないかと心配して氣を揉むばかりで、どうすることも出来ず互に顔を見せてボンヤリしてる所に赤裸のまま狂氣の如く飛び込んで来たものでありました。私は吃驚してとび上る、お鍋は腰を抜してしまいました。兄さんをお化と間違へたのです。目の上には大なたン瘤をつけ、頬つべたは大きく膨れて瘤取の爺さんそのまゝ、妖怪變化の類瘤なければあり得べからざる面相ですから驚いたのも無理はありません。其の夜の夜打は全く失敗に終りました。

兄さんは刺され損の瘤儲で、終夜吁鳴り通して苦しみました。退治どころか反對に返打ちに逢つた譯です。かうなると、いよ／＼このまゝでは済まされなくなりました。作戦計畫やり直で、頭

の頂上にトツ瘤の山を作つた伯父さんと、頬つべたに瓢箪の出店を拵へた兄さんとが顔を突合せの評定は、全く化物屋敷を現に見る光景です。種々智恵を絞つた結果、蜂は火を見て来るから巢の近くの畑で火を焚いたらよからうと云ふことに定めて暗くなるのを待ちました。そして暮るのを待ち兼ねて、暗に乗じて積み重ねた薪に火を付け、一方からは長い竿で巢のあたりと思ふ處を盲突に突きまくりました。すると、蜂はブン／＼閃を作つて巢から飛び出して来ては火に向つて來襲しました。作戦圖に當つて飛んで火に入る夏の蟲、來た奴は悉く翅を焼かれて火焰の中に落ちました。

「うまいぞ、うまいぞ。」と瘤の山と飛箪の出店とは暗の中で躍りました。火攻は功を奏して半時間ばかりのうちに殆ど蜂は焼き盡されて、伯父さん達は無事凱旋を致しました。

翌日見ると、蜂の巢は滅茶苦茶に破れて木の下に落ち、畑の中の跡には幾十疋となく蜂の死骸が轉つて居りました。

二二、日覆の下

カン、カン、カンと第三時間の鐘が鳴ると、私共は日覆の下に集りました。白襷は前列に、赤襷は後列に略ぼ隊伍が整ひますと、組の當番が出席を調べに列の數歩前に立ちます。きまり悪さうに眼をシバつかせながら、眞面目腐つて、

「氣を……付け」

號令が鼻の頭へ抜けて、額の上で渦巻を畫く。脇の方で、誰かくすくすと笑ふ、出席簿を擴げてお當番さんは、

「Aさん」「Bさん」と黄いろなを連發される。

出席を調べてしまふ頃、先生は悠然として運動場へお乗り出しになります。

「氣ま付け」流石に先生は運動場を生命としてお出でだけに、一同はピリツとして挨拶を並べた

やうにツーンと鯨子張る。例に依つて

「番號」を取るのが濟みますと、

「前へオイツ」と來る。「廻れ右へオイツ」と變る。「左向前へオイツ」となる。「右に向を換へオイツ」となる。

「足踏みオイツ」となる。眼の廻る様な忙しさ、中には右と左を取り、違へたり左りと右とが矛盾したりでお隣様と鉢合せなどやりながらも、實に先生は巧いもの、狭い運動場でも板塀にも鼻柱を打つ附けぬやう、生垣の前へ立往生もせぬ様に、口の先丈で生きた人間を玩具のやうにお扱ひになります。

若し之を私共がやるとしますと、「前へオイツ」が三度も四度も唾氣を呑み込みくした後で、やつと出て、隊が動き出します。後をどうしようかと、考へてドギマギして居る中に、もうお隣の板塀に打つ附かつて居ます。一同はドツと笑ふ。大麻胡つきで縦列を作つて、やれ安心と、「オー二」をやつて居る中に先登はもう花園の中へドヤ〜。一同又ドツとやる。「皆んなも少々考へて

歩けばよいに」と、いま／＼しがつたり、うろたへたりして、「廻れ右」をやりますと、折角笛を
持ったダリヤが踏にじられて滅茶々々。これでは、まるで茶目助が軍隊を指揮して、悪戯を始め
た様なもの。垣根を踏み破つて、お隣へ突貫のない丈がまだしも取り所。

初秋の日が容赦なく照り返す運動場をウドン粉か、飴ん棒をこね廻す様に揉まれた後、私共は
ヤツと日覆の下へ這入つて 四数番號か何かを唱へて、隊を開いて、一休みでホツと息をつきま
す。けれども、ホンの一息で、又「氣を付け」が辛を頭へ摺り込んだやうに響く。それから、「右
の足と左の足とを何とかして、右左の手をすうとか、首をか上げて、目玉を動かせ」とか何とか
注文澤山の號令で體操が初ります。そして足を踏ん張つて仰向けにヒツクリ返るやう眞似をした
り、横に臂を突き出して臂鐵砲の稽古見たやうなことをしたりいたします。先生は間を歩き廻つ
て、

「もつと力を入れないでは、蒟蒻のお化が芝居して居る様だよ。」「もつと手をしつかり伸ばさな
いと、龜の子が引きつける時の様だ。」など軽い皮肉を連發しながら、悪い所をお直しになります。

暫くして、此の蒟蒻體操の龜の子運動が終を告げますと、此度はお楽しみ旗取遊戯の様なもの
が始ります。

二手に別れて白と赤の小旗を各一つ持つて「始め」の合圖で各組の一人が走つて他の者に渡す、
早く走つて渡し済みとなつた方が、萬歳の聲を上げるのですが、走る人々は誰も彼も一生懸命、
目を吊り上げて、口を歪めて顔の格好を崩しつゝ、バタ／＼、他の人達は彌次聲援で、ヒーヒ
ー、ギヤ／＼の金切聲、まるで動物園の禽共が金網の檻で一緒に羽ばたきをしながら御詠歌
と法界節を混ぜこぜに叫び出したやうな大騒ぎ、賑かなこと、御盛んなこと。終りの鐘がイン／＼
と鳴るまで、叫びと唸りと動揺めきとが、運動場の埃をあほりながら渦を作つて居ります。
「別れオイツ、」で恰も蜂の巣を引くり返したやうに右往左往東西南北にちり／＼バラ／＼

二三、初て御飯を焚く

或夏の御休みに梅子さんの御宅へ二三日泊りました。行つた翌日遠方の御親戚に急病人が出来て御父様も御母様も御見舞に御出掛けになりました。後に残つたのは梅子さんの兄さんと、妹さんと私と四人になりました。晝間の内は鬼の留守に豆だと云つた調子で、いゝ氣で騒いで居ましたが、夕方になつて、ハタと困りました。晝御飯を喰ひ過ぎたゝめ夕御飯を焚かなきやならぬ事が起りました。

「お前達は御飯が焚けるかい。」兄さんは皆の顔を見廻はされました。三人は當惑さうに顔を見合せてニタリと苦笑を洩しました。負けず嫌の梅子さんは、

「焚けないことはないわ、家事で一度はやつたんだし、それに分らなければノートを見れば分りますわ、ねえ鈴子さん。」私だつて、「いゝえ」と云へぬ性分です。

「えゝ大丈夫だわ」と云つてしまいましたが、内心決して大丈夫ではなかつたのです。

「それなら安心した。早速焚いて頂戴、ノートと首ツ引でも何でもいゝよ、」とお兄さんに全權を委任されてしまひました。

「それでは焚きませう、」と立ちは立つたものが第一困つたのは、今晚たべるのに四人分いくら焚いたらよいかと云ふことでした。梅子さん姉妹と私の三人は額をあつめて相談いたしました。一向見當がつきません。毎回お茶碗四五杯たべることは分つて居ても御飯一杯が米幾合になるやら分りません。それが分れば四人分いくらと割出せるのですけれども、どんなに考へても解決がつきません。

併し、最後に兄さんのやうな底なし大食家も交つてをるからと云ふので三合宛一升二合を焚くことに致しました。

一體臺所の事はノートや聞きかじり丈ではなか／＼うまく行くものではありません。お米の分量はやつと多數決できまりましたものゝ、うまく行かぬのは米磨ぎです。お母さんや、馴れた女

初て御飯を焚く

中など磨いで居るのを聞きますと、ザツク／＼と面白い調子が取れて音楽的なリズムがあつて何の雑作イライラもなささうですが、さて、やつて見ますと、大違ひ、ヂャブ／＼、ヂャク／＼まるで赤ん坊が盛たむひの中で水スイ戯イでもするやうに水がとび出す、米粒が跳ね上る、袖口そでぐちがぬれる、臺所一杯水とお米がウツ散らかる。水を流せば米まで一緒に附いて行つてしまふ。一升二合のも撒いたり流したりで散々な有様です。

「と水加減はどうします。」

「さあ、今度がノートですよ。梅子さんは早速取り出して来て、ノートをあける。」

「一升到水一升二合ですよ。」

「さう、そして水はどうして量ります」

「楯たもとでいゝのよ、お米量こめはかりるので。」成程と米量楯こめはかりたもとに水を入れると底について居る糖かが眞白く上に浮く。」

「汚いね、この楯は。」

「洗へば大丈夫よ。」尤もだ。然し洗つてから量るのは手がかゝるが仕方がない。

「二合は何で量りませう」

「さうね。お茶碗でいゝでせう。あれが一合位だから、山盛やまもり一杯で一合ですわ」

「水の山盛やまもり」もおかしいけれ、ども成程之れなら正確です。早速仰に従つて水を入れて釜をかける。

先づ焚付けには新聞紙を用ゆる。焚付けは新聞の廢物に限ると先生に習つたのを實地に應用する譯です。次にその上に薪を六七本押し込む。マツチを摺つて焚口たきぐちまで持つて行つたかと思ふと消えてしまふ。今度は用心して焼え上つたのを中へ入れて新聞紙の下へおく。パツと新聞紙が焼元上る。これはよかつたと見て居ると、ツーツと一焼えしたきりで黒い烟が上へのぼつたのを最後としてまた消える。かくてマツチをすること五六度たひ、新聞紙をつめ換へること二三度で、ヤツと薪に火が移る。

これで安心と火口のふたをして三人は釜を取り巻いて様子を見守ります。待たるゝ身にはなつ

ても待つ身になるなど昔の人が云つて居ますが全くです。見て居ると吹き上るのがなか／＼待遠しい。待遠しいから蓋を取つて見たくになります。

「どうしたんでせう。」と先づ梅子さんが蓋を取つて見ます。中には水蒸氣が立つて水の上には白い泡が舞つて居ります。

「もう間もないよ。」と梅子さんは元のやうに蓋をします。それから暫く時間がたちましたがたぎりません。

「もうたぎりさうなものね。」此度は私が蓋を取つて見ました。中の状態は前と左程變りはありません。

「もう間もないよ。」と私も元のやうに蓋をしました。それから又時間が経ちました。釜の中からは何の便りもありません。

「變ね。」と妹さんが火口の蓋を開けて見ますと、火が焼え切れて居ました。「これは大變」と薪を入れたり、さしくべたりして、手がだるくなるほど團扇で煽いだり、頬つべたが痛くなるほど火

吹竹で吹いたりした揚句、火は漸く息を吹き返しました。

暫くすると、今度は本式に蓋と釜の間からブーブツと吸入器がするやうに湯氣を勢よく吹き立てるそれからシユル／＼と釜の側面を傳うて重湯が流れ落ちる。

「ヤーたぎり出した。」と又梅子さんが蓋を取りました。中を覗いて見ると、湯氣がワツと上る。釜の中はクタク／＼妙な音を立てゝ居ます。

「どれ／＼。面白いのね。」と私も妹さんも、蟹が泡を吹くやうに泡坊主がふくれたり萎んだりして居るのを三人は頬をすり付けて見詰めました。その内に泡がだん／＼消えかゝつて音が低くなつて來ました。梅子さんは驚いて蓋をかける。耳を押し付けるやうにして聞くと釜の中はグツグツ低い音を立てゝ居ました。それから又暫く時間がたちました。

「もう出來さうなものね。」と私が蓋を取つて見ますと、矢張りグツ／＼云つて小さな坊主がふくれては碎けて居ました。何時御飯になるのか見當がつきません。蓋を元通りにしてから相當に時がたつと、此度は妙な香がして來ました。

「何でしようね。」と云ふうちに、それが御飯の焦げる香だと分つた時は一同飛び上るほどピツク
 リしました。さあ、焦げ付いたと、あわてながら、火を引いたり、釜を下したり、そして早速蓋
 を取つて見ますと、どうでせう。上はまだ水が引いてしまはないのに、所々に小噴火口のやうな
 孔が出来て、そこから黄いろい煙が出てゐます。全く火山の地獄谷を覗くやうで臭氣紛々です。
 「變な御飯ね。」と云ひながらおしやもじを突込んで見ますと、お粥とも御飯ともつかぬものが黄
 いろくなつてべたつて居ます。とてもおひつには取れさうもない代物です。私共は泣き出した
 くなりました。折角の苦心が水の泡になつたのです。そこへ、お兄さんが

「變な香がするよ、焦げ付はしなかつた。」と云つて出て來られました。そして釜の中を見て、
 「ヤア、これはせんこみそうゆう（前古未會有）の御飯だ。とんでもないものが出來たね。」
 と吹き出しながら

「一體どうして焚いたんだ。」

「どうしてつて、火で焚いたのよ。」と梅子さんはべそをかゝんばかりの不機嫌、

「それは分つて居るが、水が過ぎたのだらう。」成程考へて見ますと、お米を磨ぐ時、こぼしたり、
 流したりしたのは勘定せず最初の一升二合の割で水を入れてしまつたのは少々早計でありまし
 た。併し、今となつてそんなことも云へませんから、

「規則通り一升到一升二合の割で入れましたのよ。」

「さうか、焚くのはよく焚いたがね。」三人は顔を見合せて笑ひました。

「焚くにはよく焚いたけども、時々消えたんです。」頓珍漢な答に吾ながら吹き出したくなる。

「そんなことだらう。そして時々蓋を取つて見たんだらう。」兄さんの問が急所に觸れると、妹さ
 んが、

「姉さんが度々に取つて見たんですよ。」とすつば抜く、

「私ばかりぢやなくつてよ、鈴子さんだつて取つたよ。そして秋ちやんだつて覗いて見た癖に……」
 と梅子さんがふられました。

「さうだらうと思つた。先日婦人雑誌に御飯の焚方が出て居たが、御飯の蓋を度々取ると出來そ
 初て御飯を焚く

こなふとしてあつたよ。」

「だつて取つて見ないと、何時出来るか分らないんですもの。」

「そこが時計でやるのさ。吹き出したら、火を引いて十分乃至十五分むらすのよ。」雑誌の受賣が始まつた。

「口のやうにうまくいつたら世話なしだわ、兄さんが焚いて見ればいゝ。」梅子さんは、とう／＼怒つてしまひました。

「怒つたつて今更しかたがないさ。兎に角喰べて見ようぢやないか。」四人は箸を取りましたが、牡丹餅のやうにベタ／＼、口へ入れると臭いのと苦いのが一緒になつて、喉につまつてとても二口とはたべられません。それでも我慢して一杯は目をつぶりながら鶉呑にしたものゝ誰も二口目に手を出すものではありません、たゞ澤庵の尻尾をしやぶつた丈け箸を投げ出してしまひました。

私共は明日のことを考へずに居られません。晩一度位は一杯でも済ませませうが、朝も晝も焦

飯一杯ではやりきれません。今まで何の考もなく喰べて居た御飯が急にありがたくなつて来ました御母さんの尊い體験のお蔭で焦げ臭くもなればがくもないおいしい御飯をたべさせられて居たのを感謝せずには居られなくなりました。それはさうと明日の朝はどうしようと、四人が車座を作つて評議の最中、梅子さんの御母さんが夜に入つて歸つて来られました。

「お前達の事も氣にかゝるし、御病人もよさそうだから、お父さん丈げ残つて頂いて歸つて来ました。」との事で私共はホツとしました。そして御飯の一件を話しますと、御母さんは笑ひながら、

三度たく飯にもこはし軟らかし

思ふまゝにはならぬ世の中

と云ふ歌さへあるのだから、なか／＼さうたやすくは行きませんよ。私だつてお嫁入して来た當時は泣かされましたよ、初めて味噌汁を拵へる時など、拵鉢の中へ味噌と水と一緒に打込んで拵つた所が、どうしてもうまく拵れません。力任せに拵古木を動かすとゴロ／＼ガタ／＼、拵鉢が板の間一杯躍り出す、水が跳ねる、お味噌は中で轉手古舞をしてあすこに一塊こゝに一塊、

初めて御飯を焚く

水の中を泳ぎ廻つて、何としても物になりません。私はとう／＼摺古木を投げてしまひました。今考へれば何でもないことだが、その時は情なくつて涙が出てしまひました。でも臺所見習時代はこんなことで泣いて居たら、いくら涙があつても足りませんよ。あなた方もよい體驗をしたものだこんなことが度々なくては女になれませんかよと笑はれました。

こんなことが度々あつたらそれこそ命が縮ります。女になるのも難しいものですね。

二四、支那のお芝居

今年から五前お父さんに連れられて滿洲見物に出かけたことがあります。所變ればシナ變るとは此のことで、いろ／＼面白いことが山ほどありました中で、支那芝居を見たのも其の一でした。私の見たのは奉天の南市場の劇場でした。堂々たる門を入ると左右は市場、中央が劇場です。

支那語は一語も知らないのですから、支那のお芝居が解るはずがありません。まるで聾の芝居

見で目ばかりパチタリやつて物珍しさうに移り變る場面を嚙の國にでも迷ひ込んだ氣持で見物する丈のことです。併し、敏感豚の如き持主である私はいくら聾と聾の兼合でも、第六感とやらを鋭く働かして見ますと、事件の進行状態や、表情や、せりふの調子で、今のは戦争で強いのが勝つて弱いのが負けたのだな、之は夫婦別れで泣いてるのが細君で、髯のあるのが御亭主だ。眞赤な顔してよろめきながら、怒鳴立て、管を巻いてるのは酔つ拂ひだなど云ふこと位は通譯なしでハッキリ了解が出来ますので、日本の歌舞伎や新派劇とは全く異つた古典的で珍妙な場面の展開に少からず好奇心が感奮興起とやらをして深い興味を覚え、たつた一度で支那芝居が好きになつてしまひました。これからその第六感に觸れたまゝを卒直に正直に懸値なしに御披露に及びませうか。

さて、劇場は相當に大きい建物ですが、日本のと違つて、活動館式で觀覽席は土間になつて居ます。私共は案内役の數人の方と一卓を囲みながら、そして食事をしながら見物するのであります。支那の劇場は料理屋が半分です。料理屋が半分と云ふより料理屋が發達して舞臺裝置をして

居ると云ふのが適切でせう。何のことはない、宴會場に芝居をかつぎ込んだと云ふやうなものです。日本でも劇場には賣店があつたり、食堂が備つて居たりして飲食が出来るやうになつて居るのは皆さん御承知で、芝居を見ながら辨當を頼張つたり、芝居の合の手で食堂入をしたりしますが、支那でも同様飲み食ひをしながら観劇をやりませう。表面丈け見ますと、劇を見るのに日支共に何の變りもないやうですが、よくよく見るとまるで正反對であるのに氣附ます。日本の劇場は芝居を見るが主で飲み食ひは附けたりであるのに、支那では飲み食ひが主で見ると附けたりであります。彼は口本位、腹本位であるに、我は目本位、耳本位である所にお月様とスツボンほどの差があります。だから、支那の劇場は精養軒に帝劇がお嫁入りして共稼をやつて居るやうなものです。こゝが風俗人情の差、國民性の相違であるんでありますなど、小父さんの講演口調を模倣しますと、何に小娘が生意氣なと叱られますから、廻れ右して御話を進行いたします。

舞臺は引幕なし花道なしで物足らぬ代りに其の一隅に囃方づらり並んで賑やかです。囃方と云つても決して美しい顔ではありません。赤黒い煤ぼけた角張つた面に唐黍のやうな天神髭を形ばか

り生したのや、胡麻頭のボヤ／＼した年寄の男ばかりで、きたない苦力を臨時雇したと云ふやうな殺風景さです。それが前に銅鑼や鉦鼓や胡弓や箏栗や蛇味線のやうな支那固有のあらゆる樂器を並べ立て、始めから終りまでチャン／＼ガン／＼ドン／＼ビイ／＼囃し立てる賑やかさ、騒々しさ、殊に大立廻の場となると此のチャン／＼ガン／＼が急速度の亂調子になるのですらたまりません。恰も田舎祭の馬鹿囃の中に田吾作連の樂隊が練り込んだやうなもの、のぼせ性の者なら腦味噌が爆發してしまひます。

支那では男の千兩役者を名角、女優のそれを坤角と申します。お角力取ならいざ知らず、芝居役者に角とは變たと聞いて見ますと、角は突出せるもの、突出は他より抜き出て居るのだから、角は一藝に秀でたものと云ふ意味になるらしい、さう云へば成程角でも結構な次第です。支那劇にも舊劇と新劇とあることは勿論です。舊劇は三國誌や水滸傳のやうなのに材料を取つた時代もので、新劇は我國の歌劇に近いやうなものもあるやうですが、舊劇の花形役者になると實に素晴らしいものですが。金玉燦爛たる着物に、綺羅を盡せる被り物、老人ならば純白、壯者ならば漆黒の

長髯を關羽式になびかせて鼻下から腕を蔽うた風采はとても威風堂々、大陸でなければ見られぬ猛將振り、それに引きかへて其の他の下輩の役者に至つては服装、風采全くお話にならぬ貧弱さです。舞臺上の活動にしても全く花形の一人舞臺で、大將同士は怒鳴り合つたり、青龍刀を振り廻したり、敵も味方も必死の大活劇を演じつゝあるのに、部下は悉く傍觀で、「ヤ、やつとるわい。」と云つたやうに突立つて見物して居るもあれば、ウロ／＼しながら舞臺の上に唾氣を吐き散らすもある。敵將の爲めに味方の大將が打ち伏せられて首を取られやうとも鼻をホジリながらボンヤリして眺めて居ます。大將は大將、部下は部下、人は人、吾は吾と云ふ支那一流の國民性が此の芝居の上にも見られるのが面白いとお父さんは云つて居られました。

それから更に風變りの珍と思ふのは、芝居の背景道具立て、あります。我國や歐米劇のやうな背景と云ふものは固有の支那劇にはありません。歐米劇など申します洋行でもして来たかと叱らるゝか知れませんが、此の滿洲より外に洋行した事はありませんから、パリやロンドンの舞臺は全く知りませんが、日本譯した洋劇から想像して先づさうだと獨合點しての話ですから違つて居

たら御免遊ばせ。

背景らしいものがないばかりか、劇中の必要な道具立が實に頗る甚しくお粗末です。唯々それだけでは頭の鈍角な人には分りませぬから、一例を擧げて説明を試みます。芝居が始まる前に舞臺の一隅に田舎の寺小屋學校に在る古机の様な臺をいくつも高く積み上げて、其の周圍に色の褪めた薄穢い紺色の古幕を引廻します。皆さんはこれを何だと想像なさいませぬ。とても想像は及びませぬ。現に見て居る私すら第六感、八感を働かしてあり丈の智慧を絞つても、之が何であるかは考へられませんでした。然るに、それが大軍百萬を容るゝ城壁であります。もう一遍目を拭いて見直してそこ、ここ穴のあいた薄穢い紺幕が引き廻はされて居るに過ぎませぬ。よく見直しても穴だけが餘計に見えただけそれ丈簡素を極めたものです。更に驚くべきは、城門です。二本の古竹竿に同じ紺色の布を捲いて城壁の間に立てたもの、それが三軍を叱咤する大將軍が出入する大城門と云ふのですから簡單至極。乞食芝居の舞臺掛のやう見る間に城廓が出来上ります。そこへ長槍を搦込んだ網綺を飾つた威風堂々たる大英傑が乗り込んで来る。やがて、みすばら

しい幕の城壁から半身を乗り出して例の長髯を風に靡かせながら敵状を睥睨して居る有様は、あまりにコントラストが妙で寧ろ滑稽です。

けれども。よく考へて見ますと、此の道具立の簡單質素の極端な所は、矢張支那人の生活の簡易を象徴したやうなもので、芝居氣の抜けた所に禪と能とが味はれます。誠に俗臭紛々たる中に禪味と脱俗味とを取り込んで居るのは全く支那式です。俗なるが如くして仙、仙なるが如くして俗貧なるが如くにして富み、富めるが如くにして貧なるえたいの知れない所が其の特徴だとするならば、支那の朦朧ぶりにも一寸面白い味がありますね。

話が又脱線してしまひました。最後に女優のことを一言申します。私共の見たのは、紅樓夢の舊劇の一部と、新歌劇風のもの二つに出た女優であります。女は又特別立派です。半月形の美しい曲線を描いた眉、文鳥のやう可愛い眼に水晶のやうな瞳の潤ひ。スーツと和やかな線の隆起を見せた品よい鼻、桃色の頬、花の唇、それらが鳩の卵を薄絹に包んだやうに長からず圓るからぬ顔の輪廓の中に調和がよく収まつた艶麗さは見なければ迎もお話になりません。それに濡れ羽

の艶々しい黒髪を鬢高に結んで翡翠色の玉を輪飾にし、上は薄桃色に下は水色の支那服に首から腕から裙まで青黄赤白色とりくりの珠玉で目覺むるばかり色彩つた濃麗さ、女でも震ひつきたい位です。その美しく妖しい少女が「常娥奔月」と題する歌劇の女主人となつて、紅紫の花を満たした花籠を黄金作の長劍にかつき、蓮歩華やかに歌ひ且つ舞ふ妍麗さは天女の舞でも之には及ぶまじく、観る者暫は恍惚として我を忘れ、遂には自分が舞つとるのやら人が舞つとるのやら分らなくなつてしまつて息もつく暇がありません。併し、かういふ忘我の状態は長くは続きませんでした暫くするうちに彼の女の歌ふ歌や獨臺詞が美しく朗かな聲ではあるけれども寧ろ或るやうに似た哀調を帯びた高い調子で續いて行くのにまされて來ました。細く尖つた悲叫が腦髓を刺すやうに揉むやう、又耳たぶらに電氣でもかけたやうにピリ／＼響いて來ます。これとても言葉や歌の意味が十分に解つたらきつとお父さんまでも泣かしたでせうけれども、惜しいことには全く馬の耳に念佛、十の鼻先にお題目と來て居ますから、唯々見守つて居る丈では見飽きが來て永く堪へられません。それに周圍の人は泣いて見て居るのに自分ばかりは何のこともなくてキョトンとして居るのは

あまりきまりのよいものでありませんから、幕になるまで、否幕がないからお仕舞になるまでが
實に待ち遠い思ひをしました。

それでも華やかな舞臺面の光景今尙深い印象となつて目先にちらついて居ます。

二五、生れ故郷

私は九州の田舎も田舎、大田舎に生れました。元は士族の端くれですが、御祖父さんがチョン髷
を切つて、大小を腰からはづしてからは百姓に早變りして農業生活をして居ました。牛を飼ひ、
女中や下男を置いて相當に手廣く田畑を造つて居ました。文化の進んだ今日でさへまだ電燈がな
くつてランプを使つて居る位ですから、私共が生るゝ前まではよく昔の芝居に出るやうな行燈に
種の油をともして、薄晴い火影で、お祖母さんは糸車をひく、お母さんは縫物をやる、下女は綿
繰り器械を廻はす、下男は繩をなうて夜なべをしたものだそうです。火を起すには火打石を打つ、

まるで未開人の原始的生活が、今も残つて居るが伽藍堂かまどやの破屋で行はれて居たと云ふのだから驚
き入つたものであります。

其頃の私の遊び友達は數町隔つた丘の中程にある百姓屋の小娘お菊さんでした。私はそれを
おつきやんと呼んで居ました。此邊ではさんと云はずにやんと云ふのが風習です。私が四つで、
そのおつきやんが七つでありました。私はデブ／＼丸く肥つて居り、おつきやんは小柄で瘠せぎ
すでした。遊び友達と云ふよりは寧ろ半分子守役であつた彼の女は雨が降つても風が吹いてもお
役目のやうに毎日朝早くからやつて來ました。

『おごしやま、あんびませう』（お嬢様、遊びませう）。

『ナイ。あすばうナム』（ハイ、遊びませうね）二人は姉妹のやうに仲よく終日遊び暮しました。
一寸お断りしますが、『ナイ』とは『ハイ』と云ふこの地方の方言です。此の『ナイ』は他所の人か
らはよく『無い』と云ふ意味に誤解される言葉です。

或時、旅人が村の小店に

『お免なさい。』と這入つて来ました。店のお神さんは

『ナ、およしまつせ』（ハイ、いらつしやいまし）と、お世辭を云つて挨拶をしますと、旅人は變な顔をしながら

『煙草を一つ下さい。』

『ナイ』。旅人は面喰ひました。

現在煙草が目の前に並んで居るのに『無い』とは變だ不都合だと、いま／＼しさうに

『ないではない、其處に在るではないか。』

『ナイ』お神は矢張ナイと云つて居る。いよ／＼腹立しくなりました。

『そこにあるのは何だ。煙草ぢやないか。』

『ナイ。煙草だす。何を上げまつせうか。』答は益々頓珍漢です。

『無いなら外には何も入らん。』お客はボイと出て行つてしまひました。お神さんは狐につまゝれたやうにアツケラカンとして旅人の後姿を見送りました。今ならこんな馬鹿げたことはありません

まいが昔話として笑草が残つて居ますから、此邊の言葉を丸出しで都の眞中で話しましたなら、それこそ皆さんは支那人か朝鮮人と取違へるでせう。

話は元へ戻ります。おつきやんはよく私を負ぶつてくれました。圓く肥つたのが、小さく瘠せたのに負ぶられるのですから、蛙がいもりに負ぶられた格好です。コロ／＼して落着の悪いこと夥しい。或日例の如くいもりは蛙を負ぶつて裏の坂道を薄畑に行かうとしました。坂の中途まで來ると、いもりは足を辻べらしました。蛙の重味で一たまりもなく前へのめつてしまひました。蛙は振り落されぬやうにしつかりしがみ着いて足をバタつかせたからたまりません。蛙といもりは一塊になつて坂の下までコロ／＼轉がりました。下の道に行つて止つた時、二人は離ればなれに投げ出されました。そして同時に『ワーツ』と大聲を立て、泣き出しました。何事が起つたかと、お母さんが駈け着けた時は、いもりはおでこ膝坊主とを摺りむき、蛙は頭の後に大きな瘤が出来て居りました。

玩具に恵まれぬ片田舎の生活は自然物の總てが私共の玩具でありました。家の周圍には幾本も

大きな椿の木がありました。春になると千燈籠を燈したやうに赤い花が一杯咲きました。そしてそれが座一面に落ちました。私共はそれを拾ひ集めて、藁しべに一つ／＼丁寧に貫いて、大小の花輪を造りました。大きいのは首から胸に懸け、小さいのは左右の手首に捲いて、私は婿様、おつきやんはお嫁様となりました。お婿様は先へ威張つて、お嫁様は後から畏まつて庭の内を一互歩き廻りました後、中央に敷いた花御座の上に差向ひに据りました。お嫁さんの着物は据はるのには餘り短かゝつたので、キチンと膝を押し立てゝ見ますと、裙の下から膝坊主が顔を出して居ます。お嫁さんはそれを頻に氣にしながら裙を引張つて坊主に被せまされけれども、手を離すと坊主は又顔を出します。

さて、二人がかうして氣取つた顔付で向ひ合つて見ると、何だか耻しいやうな、傑ぐつたいやうな氣がして何と挨拶してよいものやら見當がつきません。暫くマゴ／＼した揚句、私は思ひ出して、チヨコンと首を下げて一禮に及びますと、お嫁さんは面喰つて目玉をクルツと廻轉させながら

「へ、ツ、」と笑つて之も亦チヨコンとやりました。顔を上げて二人が目を見合せまると、急に可笑さが喉へ込み上げて來ました。けれども、大事な場合ですから二人とも我慢をして込み上げて來る可笑さを嘔み潰して、口元を少し歪めて鼻の孔をムス／＼と動かした丈でした。何を云はうかと考へて居るうちに、今度はお嫁さんが先を越して

「今晚は」と申しました。今朝飯が濟んだばかりで、「今晚は」何だか勝手が違ふやうにも思ひましたが、ゆつくり考へて見る場合でありませんから

「今晚は」と私も鸚鵡返しをやづて一二度體を揺りました。少くきまりが悪かつたのです。

すると、何處かで、くす／＼笑ひ聲がしました。見ますと、いつの間にかお母さんが縁側に立て居られました。二人とも急に可笑くなつて吹き出しました。

二人は庭で飯事に飽くと、縁側に上つて毯をつきました。毯は心に海綿を詰め、上を古綿で包んで屑糸で堅く捲き、更に其の上に赤や青や黄色の色糸をかけて、お母さんがこしらへて下さつた美しい毯でありました。おつきやんは、大變毯つきが上手でした。片手ばかりでなく兩手を使

つて毬歌に合せてトン／＼と調子よく突きました。

おてんととう、おてんととう。

おてんのいつさま十三四

わしが小枕、一百ぢやあ、一百ぢやあ

と、面白さうに歌ひながら上手につきました。そして、最後の『一百ぢやあ、』で私に突き渡しをいたします。所が、私はまだ下手でした。おつきやんの、『おてんととう』の歌が、『おてんと』位まで行くか行かないうちに毬は私の掌から横へとび出して縁側をひとりでボン／＼躍りながら、私が周章て、追つかける間にコロコロと庭へ轉がつて行きます。その度におつきやんは下においては取つて來ました。そして、此度はよく突けたと思つた時でも、

おてんととう、おてんととう

おてのいつさま

に、かゝらぬうちに毬は跳ね出します。一つの歌が仕舞になるまでに、私は幾度か突きそこない

おつきやんはその度に毬拾ひに行きました。私はいま／＼しくてたまりません。そして自分の下手糞は棚へ上げて喰つてかゝります。

『おつきやんは、吾がよかごとばかい歌ふせんか、突かれんとよ』(自分がよいやうにばかり突くから、突かれないのよ)、すると、おつきやんも意地坊ですから黙つて居ません。

『さうだつせんばい。おごしやまの下手せんださい』(さうぢやありません。御嬢様が下手だからです)、と云ひながら、私の毬を取つて、一入聲高く、『おてんととう』を歌つてトン／＼と調子よく突きます。まるで、毬が掌に吸ひ付いて來るやうに見えます。いま／＼しさ、妬しさで氣がくしや／＼して居る所に、おつきやんは一歌うたひ終つて今度は、私に毬を渡さうとします。二度も三度も繰返し繰返し獨で突いてしまひますので、いよ／＼腹が立ちました。そして、前後の考へもなく腹立ちまぎれに、彼の女のついて居る毬を横手で拂ひました。毬は不意打を喰つてボンと庭に落ちてコロ／＼と向うの方へ轉がつて行きました。おつきやんは立ち上るなり、シヤ／＼と私の手を打いて縁側をとび下るや否や一目散に歸つてしまひました。私はワーツと大

聲で火の附いたやうに泣きました。

おばあさんがビツクリして部屋からとび出して來ました。それを見ると、私は一層大きな聲で泣きました。おばあさんがどうしたと尋ねますから

『おつきやんがぶつた、』と自分の悪いことなどはおくびにも出さず、アーン／＼おばあさんは、『よし／＼。』と私を抱き上げて部屋に連れて行つてお菓子を一杯掴ませました。私の御機嫌はすつかり直つてしまひました。けれども暫くしてお菓子がなくなると、私は急に淋しくなりました。そしておつきやんを思ひ出して矢も楯もなく、おばあさんに負ふさつてお菓子を待つて迎へに行きました。三十分前の出來事などは綺麗サツパリ忘れしまつて。

畑を一つ隔てた隣の家には一匹の豚を飼つて居ました。豚小屋は豚が住つて以來一度も掃除などした例がなかつたので、非常に穢いものでした。何時入れてやつたか分らない糞の下敷は小便と糞とでジク／＼して居ました。豚はその穢い所にちつともお構なしに大きな圖體を投げ出して寝轉んで居ました。そして時に思ひ出したやうに起き上つては、隅／＼に在る瓶に腐つて居る米

の膾汁や野菜屑の中に顔を突つ込んで口をクチャ／＼させては頻に貪り食つて居ました。だから體も顔もドス黒く穢れて生來の白豚も見る影もない色になつて居ました。私共が小屋の前に行きますと、その薄穢い圖體をムク／＼と起して片足を柵にかけながら、ラツバのやうに先廣がりのクシャ／＼した鼻を突出してヴィ／＼と呼鳴りました。私共は驚いて逃げました。

或日のこと、何氣なく一人で裏口から出て行つて一心に嫁菜を摘んで居ますと、突然ヴィ／＼と云ふ聲がしましたので、ヒョツと顔を上げますと、此の世の者とも覚えぬやうに穢れ腐つた顔の持主が例のクシャ／＼鼻を一層先に突出してノツソリ／＼二三間先に現はれて居るではありませんか、私は膽を潰してしまひました。ギヤーツと殺されでもするか如く叫んで逃げ出し見ましたが、夢にお妖怪に逐つかけられた時のやうに足が地べたにくつつ着いて動きません。いよ／＼大聲で泣き立てゝ居ますと、畑に出て居た私の小父さんが走つて來て、鋏を振り上げながら豚を怒鳴り付けました。今度はさすがの鈍兵衛の豚も膽を潰しました。クルリと方向轉換をやつて逃げ出しましたので私は助かりましたが、それから間もないこと、豚は一生懸命に逃げ走つて勢餘

つて、小屋の脇に在つた肥壺こやしづぼの中に二び込んでしまひました。小父おぢさんが駈け付けた時は、豚は二本の足を天に上げてバク／＼して居ました。さあ大變です、何十貫とある大豚が眞逆様にとび込んでから一人や二人の力ではどうすることも出来ません。隣近所の人を押し寄つてやつこのこととで引き上げた時は臭氣紛々たる黄金の大テンプラが出来て半死半生の體でありました。水を汲んで来て洗ふやら、手當をするやらして、豚の一命はやつと取り止めましたが一時は大騒ぎでした。

二六、脳味噌脱線

K子さんは、クラス中で最も振つてる方でもあります。尤もクラスの中には随分振つてる方があります。M子さん、S子さんの如き、其のチャンピオンたるに耻ぢません。M子さんは、時世後れを非常に氣にされます。恰も勉強家のD子さんが落第點を取りはしないかと心配される時の

様にそして時々新しい流行リウウの髪を結つて衆目を驚かされます。例へばニコニコ社の主催しゆざいで、平面會でもあれば一等賞疑ひなしと云ふ平べつたい顔に、思ひ切つた耳隠、まるで顔が飄ひら蕪わの尻しつぽんを押し潰した格好、それに、鼻が恐縮おそしやくして馬鹿に謙遜な状態に陥つたりして特色を發揮はつぱいされます。

又S子さんは、英語が得意で、時折グツド、モーニング、コートなど云つて平氣で握手あつかいを求められるので、私共も面喰ふことがあります。

かう云ふ人々を列挙れいごしますと、一寸ノートブックの材料が出来ますが、K子さんのことを最初に申して置きながら、横道へそれて道草を喰ふと、『鈴子さんの話は珊瑚さんご見た様に枝ばかり多くて、内容に乏あましいなど』と、新派のクラスメートに側面攻撃を受けますから、先づK子さんの——地震ちゆじんぢやないが振ふ所以を説明いたします。

抑々K子さんは、ハイカラだがパンカラだか見當がつきません。エレンケイなどを尊敬そんけいされるかと思へば、紫式部むらさきしきぶが理想の人だつたりします。御本人の説明を聞いても悟さとりの悪い者には、頭痛が腰へ廻つた様な工合で一向要領を得ない新しい文を作つて、クラス會などの時、得意で小一時間も

朗讀ろうどくされることありますので、皆んながK子さんの文には中毒ちゆうどくして居りますから、此の得意の朗讀が始りますと、恰も電車が脱線して市民が迷惑を受けると同様にクラス中が随分迷惑を蒙ります。

然し私は決してそんなに馬鹿にした方でないに常に敬意を表して居ります。其譯はかうです。

先日或方がT子さんの伯父さんの頭は、どうしてあんなに禿はつたのだらうと云ふ問題が提出されました。これは近頃最も興味ある問題として大に歓迎されましたが、誰一人満足な解答が與へられませんでした。尤も中には、ゲジ／＼が舐めたのだらうとか、臺灣坊主がくつ着いたのだらうとか陳腐ちんぷの説を吐ひいた人もありましたけれども、何れも感服が出来ませんでした。K子さんは、『あれは禿はつげたのでなくつてよ。』と云ひ出されました、それ又例の脱線かと、皆さんは嘲あざわらりの目をK子さんに浴びせかけました。S子さんの如きは殊に馬鹿にして、

『あんなに光つて居るのが禿はつげてなくつて何でせう。額の領分が開拓かいたくされたのでせうか。』など、冷笑されますと、K子さんは平氣で、

『さうかも知れないけれども、あれは禿はつげたと云ふよりも、摺すりれたと云つた方が穩當かんたうよ。』と云はれますと、S子さんは、

『妙な穩當もあつたものね。』と頭つから茶化ちやくわして居られます。けれども、K子さんは一向平氣で、『でもね、あの頭は明治前からの頭でせう。若しさうとすれば、随分甲羅を経た頭だから、帽を被つたり、脱だいたりする毎に毛が摺り切れて、あんなに光りある鬘まんとなつたんでせう。』

一體K子さんは新しい少女だか、古い少女だか、醒さめた人だか、眠ねれる方だか、一寸凡眼に見當がつかぬ所からして、振つて居るオーソリチーとでも申しませうか。

此のオーソリチーの君は、新流行のシヨールなどかけて澄すして見たり、洒落しやれたヘーヤピンをさして氣取つたりされる所はハイカラと誤解されさうですが、

襟えりに垢かをつけることはあつても、顔にお白粉おしろいなどつけた覺えがない方で、お白粉をつけることは罪惡の様に思つて居られます。そして時々お白粉排斥論などを始められます。其條理そのすべが立つて居て、私共も感服することがあります。簡単に要領を摘んで申さうか。

『お白粉と勉強とは兩立しません。勉強は眞黒になつて働く方、お白粉は眞白に塗つて氣取る方例へば雪と炭團、鶯と烏の如きものです。お白粉をつけたり、勉強をしたり、一所に出来ないのは、雪が炭團となり、鶯が烏になることの出来ないのと同様です。』など、なか／＼論法がK子さんの特色を發揮して面白いのであります。

然し、クラスの中には、K子さんを多少腦味噌が脱線して居る方の様に批評する方もありますけれども、私はそれは酷だと思ます。

K子さんは、二言目には『自覺した女』を振り廻はされます。私は先日自覺した女の意味を尋ねて見ました。すると、K子さんが云はれるには、

『自覺の自はみづからでせう。』

『エ、』

『自覺の覺はおぼえるでせう。』

『エ、』

『だから自分で覺える女と云ふ意味ですよ。』

私は何だか要領を得ませんので、

『云ひ換ゆれば、どんな事でせう。』と問ひますと、

『云ひ換へなくつても、常識の判斷で分りますよ。そんなに自覺が悪くちや話せないわ。』と、とう／＼私は自覺しない女とされてしまひました。

一七、そ、つかし屋

寒い時は誰でも火の顔を見ないと承知が出来ません。殊に板の間の、だだつ廣い學校の教室は一月末から二月にかけての寒さは又格別で、三尺角の大火鉢の周圍は殊の外賑ひます、三十餘人の一教室に唯一つの火鉢ですから、早いものが勝ちと云つた様に皆先を争うて休みの時間は其周圍に集ります。御互に譲り合つても、直に満員になつて仕舞ひますが、夫れでも、二人も三人も

折り重つて後の方から人の肩を越して手を差し出して居る方が多い。あれでは火が遠くて、指の先も暖りはすまいと思はれますけれども、火の顔さへ見れば承知して、お砂糖お砂糖に集る蟻あひの様に寄りたかつてまゐります。寄りたかるとなかなか黙もくつて居られぬ速中で迂まがつたの轉んだの、面白いの可笑しいのと、笑ふやら饒舌じょうぜつるやら、まるで蜂の巢をツツ突いた所に雀の群が突貫した様な騒ぎが始まります。それを例によつて側面から一寸スケツチして見ませうか。

『此の頃の様に耻しい思ひをしたことは生れて始めてでしたよ、』と火の上に手をかさしながら、先づ口を切つたのは君子さんであります。

『時々兄様が學校から歸つて来て、玄關玄関で『御免下さい』とよく御客様の聲色こゑいろを使ひますから、私は時々騙だまされて、『ハイ』と返事をして、障子しょうじを開け鄭寧ていせいに手を突いて、どなたかと見ますと、兄様が『バー』と、云つて擲なげますから悔しくつて何時か仇かたきを取つてやらうと思つて居ますと、或日のこと、丁度兄様が歸る頃、玄關の戸が、ズラリと開いて、

『御免』と云ふ聲がします。それ来た、又例の兄様の惡戯いせごかと、獨合點ぼくごてんで微笑ほくそみながら、ソーツ

ト奥の襖を開けて、一つ裏をかいてやらうと、行きなり玄關の障子をサラツと開けて、

『赤ん目エー』と目を引つ張りながら大聲で飛びだしますと、こはそも如何に、兄様と思ひの外全く知らぬ他所よそのお客様、そのお客様も不意喰つてアツト吃驚びっくりされた御様子、夫れよりも尙面喰つたのは私で、面目ないやら、耻しいやら、『御免下さいませ』と飛び下つて障子をびしやり……』と話が終らない先に、皆様は、『オホホ、アハハ』と火鉢の周圍まわりはヒツクリ返る騒ぎであります。

『私もそゝつかしいので時々失敗しますが、つい二三日前のこと、洗湯に行つたんですよ、そして自分の石鹼だと思つて頻りに使つて居ますと、お隣に洗つていらつしやる人が、

『失禮ですが、石鹼をお貸し下さいませんか、』とおつしやいますから、妙な人だと思ひながら、『ハイ、どうぞ、』と差上げますと、使つて脇わきにお置きになります。此度は私が、『失禮ですが、どうぞ』と手を出しますと、『ハイ、どうぞお使い下さいませ』と此度は其方が如何にも自分の物と云ふ様な態度ですからいよゝ、妙な人もあるものと思ひながら、フツと横を見ますと、私の石鹼

はチャンと其處にあるぢやありませんか、自分の積りで使つて居たのは、人ですもの、『御免下さい』と譯を話して誤りはしたもので、きまりが悪くてよく暖まりもしないで、コソ／＼と出てしまひますとハクションが四つも五つも続けさまに出て通の人にチエストとやられるんですものいま／＼しくつて』と清子さんが語られますと、『其顔が見たかつたのねえ、』と皆様は大笑ひ。

『これは昨年の春のことですよ、』と此度は菊子さんの御話で、話はますます佳境に入ります。

『麴町での小學時代のお友達を或日始めて尋ねて、行つた時のことですよ。其のお友達は林田ふみ子さんとおつしやるのですよ、前に地理は略伺ひましたから、見當をつけて行つて見ると、同番地の多い所で、車屋に聞いてやつと此横町だと分りました。教へられたまゝに行つて見ると成程、古びては居ましたが、林田と標札がかゝつて居りますから、やれ嬉しやと玄關に立つて、案内を請ひますと、取次の女中はまるで山出しと見えて、襷掛けのまゝ出て、ツツ立つて居ますから、

『文子さんはお内か、』と尋ねますと、『今お風呂でございますから、上つてお待ち下さいまし、』と

申します。云はるゝまにお座敷に通りますと、女中は獨り合點か、お母様にでも命じられたか、お茶を持つて来る、お菓子を持つて来る、そして餘つ程妙な女中ですよ、お菓子を私の前に置いて頻りにお取りなさいましと云ふでせう、けれども、そんなにお菓子なんか直に取られるものですかね、それで遠慮して居ますと、『それぢや私が取つて差し上げませう、』と云つて無理に私の手に乗せて呉れて、

『私も一つ、』と自分も掴むんぢやありませんか、可笑しくつて吹き出したくなつたのよ、と話されるので、皆さんも、『随分な女中ですねえ、と笑ひながら呆れて居られますと、『それ丈けなら、よいのですがねえ、これからが大變なんですよ。間もなく文子さんが歸られた様子、

『さう何方。』と云ふ聲がしますと、女中の聲で、

『先日御出の方でせう、』と云つて居る、私は變だと思ひました。今迄一度も茲に來たことはない、女中さんは誰かと間違つて居るなと思ひながら、聞いて居ると、此の方に足音がして、スーツと襖が開いて出た顔を見ますと、文子さんぢやありません。『オヤ、』と思つて居ると、向ふでも『オ

「ヤッ、」と云ひながら、襖を締めて引き込んで仕舞はれました。

私の胸は急に騒ぎ出しました。すると、今の方が、

「お松や、あれは何方、」

「何方か存じませんが、お嬢様のお友達でございませう。」

「いゝえ、私は知らない方よ、」

「だつて文子さんとは云つていらつしやいましたよ。」

「でも知らない方だもの、お名前を伺つてお出で。」

いよ／＼怪しくなつて私の胸は一層動悸が早くなりました。何だか狐に魅まれた様であります。すると女中がやつて来て、

「お嬢様は知らんとおつしやいますが、あなたはどなたでございます。」と云ひます。

「私は鈴木ですが、こちらは文子さんのお宅でせう。」

「ハイ左様でございます。先のが文子様でございます。」

「オヤさうですか、もう外に文子さんはいらつしやいませんか、」此問は自分ながら可笑しいと後で気がつきましたが、女中さんは眞面目に

「いゝえ、そんなに澤山はいらつしやいません、お一人きりでございます。」此の問答は餘程間拔けて、頓珍漢だつたと見え、襖の外でクス／＼と笑ひ聲が洩れます。私は眞赤になつてしまひました。然し、どうも變ですから、

「此方は林田さんですねえ」と申しますと、

「いゝえ、こちらは村田さんでございます。林田さんは此の先です。」と云はれて始めて標札を見違つたことに気が附くと、きまりが悪くて頭がガンとして仕舞ひました。

「さうですか、どうも失禮しました。」と夢中になつて玄關へ飛び出して見ると、手に何か握つて居るのに気がつきまして、フツと見ると、先に女中に貰つたお菓子をしつかり握り潰して居るぢやありませんか。」

之を聞いた皆さんが、火鉢をたゞいて一時に笑ひ崩れる。

昭和三年九月二十日印
昭和三年九月廿三日發

刷行

ほゝゑむべん先
定價金六十五錢

版權所有

著者 蝸牛園主人

發行者 橋川升一
東京市牛込區早稻田南町三九

印刷者 橋川升一
東京市牛込區早稻田南町三九

印刷所 精華堂印刷所
東京市外戶塚町字下戶塚二四〇

發行所

東京市牛込區早稻田南町三九
精華堂

振替東京六三五七〇番

終